

千葉県四街道市鹿放ヶ丘地区の開拓者のオーラルヒストリー

日本大学生物資源科学部 獣医学科：堀北 哲也

I. はじめに

第二次世界大戦前の 1938（昭和 13）年から終戦の 1945 年にかけて、茨城県に満蒙開拓青少年義勇軍の訓練所が開設され、15 歳から 18 歳の青少年が満州（現、中華人民共和国東北部）を開拓すべく訓練を受け、86,350 人が満州に渡った。しかし訓練中に終戦を迎えた者たちは、郷里に戻ったり、あるいは日本各地に入植したりした。この訓練所で終戦を迎えた者たちのうち 172 人が終戦直後の昭和 20（1945）年、千葉県四街道市鹿放ヶ丘（ろっぽうがおか）地区に入植し、その後も営々と彼ら自身のライフサイクルを営みながらこの地で暮らしている^{1,3,7}。

本研究は、当該開拓団の構成員（本人、妻、2 世）20 名からの個人史の口述記録をもとに、昭和から平成にかけての鹿放ヶ丘地区の開拓の歴史を記録することを目的としている。彼らは鹿放ヶ丘に入植後、この地を開墾し、家建て、妻をめとり子供や孫をもうけ、現在 86 歳から 89 歳になり、元気にその余生を送っている。この調査の目的は、彼ら、開拓者たちのライフヒストリー（個人史）をインタビューすることで、歴史の流れの中で自分たちの人生を営んできた開拓者たちの生を記録することである。

II. インタビュー方法、対象者およびスクリプト

1) インタビュー方法

事前に連絡し許可を得た 20 名にインタビューを実施した（表 1）。インタビューは半構造化インタビューで実施した。すなわち、特に質問項目は設けないが、義勇軍への志願の動機、入植時や結婚した時の気持ち、今に至る暮らしの変貌やエピソード、人生において印象に残っていることなど、大まかな質問項目は設定してインタビューを実施した。

対象者（話し手）20 名の内訳は、本人 11 名、妻 6 名、子 3 名であった。インタビュー期間は、2012 年から 2016 年、話し手の年齢は、本人が 83～87 歳、妻が 75～83 歳、子が 53～67 歳であった（いずれもインタビュー当時の年齢）。聞き手は 7 名、スクリプター（音声記録を書き起こした人）は 16 名であった。スクリプト（書き起こし原稿）は、文法上の不具合あるいは不明確な指示語等があっても原則として話したままを記録した。インタビュー時間は、一人当たり 50 分から 2 時間 15 分で、合計 28 時間 4 分であった。またインタビューの書き起こし原稿は、一人当たり 6,422 文字から 35,351 文字で、合計 425,461 文字、400 字詰め原稿用紙で 1,064 枚であった。またインタビュー時には随時写真撮影を行った。なお、実名および写真を公開する場合は本人らの許可を得ている。

表1 対象者の概要および聞き取り状況

対象者	年齢 ¹⁾	生年月日	聞き取り 年月日	聞き取り 時間	文字数
Aさん	83	1928(S3).12.5	2012.6.9	1時間 59分	22,216字
Bさん(妻)	83	1928(S3).10.24	2012.6.16 2012.6.27 2012.7.7	2時間 15分 50分 2時間 13分	29,542字 6,422字 27,498字
Cさん(妻)	75	1936(S11).11.7	2012.7.28	1時間 46分	28,930字
Dさん(子)	53	1959(S34)			
Eさん(妻)	80	1932(S7).7.27	2012.8.4	1時間 50分	31,975字
Fさん(子)	53	1959(S34).4.10			
Gさん	82	1930 (S5)	2012.10.21	1時間 12分	25,428字
Hさん(子)	67	1944(S19)	2012.11.4	1時間 12分	20,148字
Iさん	87	1928(S3).11.26	2016.4.24	2時間 2分	35,351字
Jさん	87	1928(S3).11.19	2016.4.24	1時間 44分	20,012字
Kさん(妻)	85	1930(S5).10.28			
Lさん	86	1929(S4).10.29	2016.4.29	1時間 41分	17,503字
Mさん	87	1929(S4).3.14	2016.4.29	1時間 30分	22,666字
Nさん	87	1929(S4).11.20	2016.5.15	1時間 48分	25,513字
Oさん(妻)	83	1932(S7).6.1			
Pさん	85	1930(S5).7.15	2016.5.15	2時間 2分	26,925字
Qさん	86	1929(S4).11.22	2016.6.18	1時間 44分	28,644字
Rさん	87	1928(S3).8.2	2016.7.3	52分	34,504字
Sさん(妻)					
Tさん	85	1931(S6).3.25	2016.8.6	1時間 24分 4	22,184字

1) インタビュー時の年齢

2) 対象者（話し手）

対象者は、1928（昭和3）年度から1930（昭和5）年度に生まれた人に限定されていた。これは1945（昭和20）年にこの鹿放ヶ丘地区を開拓するためにやってきた入植者が、満蒙開拓青少年義勇軍の訓練所に1943（昭和18）年から1945（昭和20）年にそれぞれ15歳の時に入所した3つの学年に限定されることによる。彼らは、入植時から現在に至るまで学年ごとに会を作っている。すなわち、辰巳会（1943年度入所した当時3年生の最年長組）、2期会（同1944年、2年生）、はたち会（同1945年、1年生）である¹⁻³。

彼らは全て、義勇軍に入隊直後に幹部候補生として選抜され義勇軍内にある基幹学校に配属された。通常は3か月の訓練の後に満州に渡るが、基幹学校に配属された者は3年の教育を受けたのちに渡満する⁴。よってこの基幹学校の3年生、2年生、1年生が、1945年8月に終戦を迎え、同年10月および12月に同校の高井篤先生をリーダーとして合計約170名が千葉県四街道市にやってきた。

以上のような経緯により、この開拓団は入植時 15 歳から 18 歳の青少年 170 名と若干名の成人により構成されていた。

今回の対象者の出身地は、山形県、長野県、新潟県、和歌山県、徳島県など多岐にわたっていた。しかしながら共通しているのは、大人数の兄弟の真ん中から下であり、決して長男ではないということであった（表 2）。これは農家を継ぐのは長男であり、次男以下は分家せねばならず、その際には新たな土地が必要であり、それを満州に求めたという事情による。

義勇軍に入隊し渡満した 26,695 名の出願書類を調査した報告^{5, 6}によれば、出願時の出身地域は農村部が 90.1%、家庭の職業は農業が 76.1%、続柄は次男・三男が 70.5%となっている。これは、満州を開拓して新たな土地を求める農家の次男以下の若者が、義勇軍に志願してきたという当時の状況を反映しており、今回の対象者もこの枠組みの中にいる。加えてこの状況は、満州を建国し、その地を植民地化しようとしていた当時の日本の国策の大きな流れの中にあった^{7, 8}。

表 2 対象者の出身地、実家職業、兄弟および結婚年

対象者	出身地	実家職業	兄弟	結婚年
Aさん	長野県伊賀良村	農業	9 人兄弟 6 番目	昭和 25 年
Gさん	新潟県旭村	—	—	—
Iさん	徳島県名西郡神山町鬼籠野	農業	6 人兄弟 4 番目	昭和 28 年
Jさん	長野県下高井郡木島平村上木島	農業	7 人兄弟 4 番目	昭和 28 年
Lさん	長野県上諏訪町	呉服	9 人兄弟 5 番目	昭和 29 年
Mさん	福島県福島市下鳥渡南島	農業	9 人兄弟 6 番目	昭和 28 年
Nさん	和歌山県有田郡有田川町東大谷	農業	8 人兄弟 6 番目	—
Pさん	和歌山県粟生	林業	5 人兄弟 5 番目	昭和 26 年
Qさん	栃木県那須郡馬頭町大山田下郷	農業	5 人兄弟 4 番目	昭和 28 年
Rさん	山形県寒河江市幸生	農業	12 人兄弟 4 番目	昭和 28 年
Tさん	長野県下伊那郡下條村	農業	8 人兄弟 4 番目	昭和 25 年

また今回の対象者 11 名（本人 9 名、妻のみ 2 名）のうち、8 名の結婚年が 1951（昭和 26）年から 1954（昭和 29）年に集中していた。これは同世代が入植したことによる当然の帰結であるが、このことが、この開拓集団の現在に至る世代構成を決定づけている。すなわち、2017 年現在、この開拓集団の一世は 80 代後半、二世は 50 代後半～60 代前半、三世は 20～30 代と各世代に年齢が偏っているのが特徴である。このことがインタビューでも語られていた多くの事象に影響していた。

3) スクリプト（口述記録）

以下に主なスクリプトを記載する。

(1) 満蒙開拓青少年義勇軍への志望動機について（表 3）

義勇軍への志望動機は、多くは、農家として満州に新天地を求めた者であった。また、陸軍幼年学校への入学が第一希望であったが、身長が低いなどの理由で同校への入学がかなわず義勇軍に志願した者もいた。また教員の勧めに応じた者もいた。これは当時満州移民を推進している国策に則っていた^{5, 7)}。

表 3 義勇軍への志望動機について

Aさん	（どうして満州に行こうと思ったんですか？） ああ、行こうと思ったのは。さっきも言ったように、うちの隣村の先輩の人ですがそれはすごい頭のいい人で…。 その先輩の話を聞いたから。というのはさっきも話した、ちょうど帰ってきたときに、先生がうちの学校へ転校になって来とったの。で、挨拶にきた。帰ってきて。その先輩に、ちょうどいい時に来た、じゃあ話してやってくんないか、時間はいくらでもいいからつつて、私たちは初めて、その義勇軍のあるいは、満州にいくための話を聞いたわけ、先輩から。
Iさん	（どうして内原の義勇軍に行こうと思ったんですか？） そうですね。まあ、あの、その頃は、もう昭和 19 年だからね、ちょうど戦争もたけなわで、もう職業も限られてね。軍需工場へいくか、それからまあ義勇軍っちゅう国策でね、奨励されとって。あとは、まあ、1、2 年おって兵隊に志願するかね。 そういうようなあれで、職業も選択なくて、でまあ私、次男坊だからね、大陸、満州は国策で学校の先生にも勧められてね。 でまあ健康であれば試験もなくて、あの入隊入所できるってね。で、先生に言われて、はい、いいですよっていうことでね、親の許可を受けてね。
Lさん	（長野から満蒙開拓義勇軍に行こうと思ったのは、どうしてですか？） 時代が時代だから。少年兵になるには背が低いし、戦車兵が 1 メートルと 36 なんだよね。少年戦車兵は。で、私は 1 メートル 34 しかなかったから。一番チビスケで選外なんだよ。で、軍需工場に行くのは油が嫌だったから。格好よく言ったら北の守りでもって、満州に行って。 で、就職の先はもう少年兵と満州と、あとは軍需工場です。家にそのまま残る訳にはいかないんで。
Lさん	（福島から内原に行かれる訳ですよ。その時、どんな思いで故郷を離れて行ったんですか？） その時は、昭和 18（1943）年でしょう。戦争真っ最中ですよ。18 年、小学校…今の中学 2 年ですか？卒業したらねえ。なんかもう、いれないんですよ。自分のうちになんか。 少年飛行兵やら少年何兵とか全部やったけど、私みたいに背が小さかったですから

	ね。体は丈夫だったですけどね。背が小さいのは軍隊に取ってくれないですからね。 何か仕事を見つけなきゃならんという時に、満州に行ったら作物はある。土地も一杯ある。満州開拓に行けっていっぱい宣伝があつてね。そういう良いことなら行こうかということで、来た訳ですから。 (特に寂しくはなかったんですか?) 寂しくなんて全然ない。私は喜んで来た方ですから。
Pさん	(どうして、内原の義勇軍に行こうと思ったんですか?) あのね、私の出身の栗生っていう地区は、大体 200 世帯くらいの集落なんですよ。川の両側に本当に少しの集落で。それで、200 所帯の中で、戦争が終わった時点で、戦死者が 63 人いたんですよ。それくらいの状態だったのね (苦笑)。 それでとにかく、「男は必ず戦争に行って死ぬ、死ななきゃならんものだ」って頭から決めてたんですよ。そして、一番最初に自分の目指したのは、予科練、予科練習生…ねえ、飛行兵の。志願して…、でも操縦関係のアレではだめだから、一般の整備兵としては採用するっちゅうて連絡来たんですよ。でも、その時に「飛行機に乗って、空で死ぬ以外はだめだ」っちゅうて、断ったんですよ。 その後に、今度、大阪に「陸軍幼年学校」って行って、少年兵のアレする学校があったんですよ。そこに願書を出したけども、4 月、3 月のころになっても、連絡が全く来なくて、もう行くところがないなって…あとは、あの～、まあ、軍事工場とか、そんなのもあったけどもね？ とにかく死ぬための場所を探すことが、一番の念願だったね…。
Qさん	(どうして内原に、義勇軍に行こうと思ったんですか?) いやあ、親の反対はあったんですけど。 (親の反対があったんですか?) あった。先生からは行けってしょっちゅう言われて、親はだめだと。だいたい、親はともかくも爺さんは、満州なんか行ったら二度と帰ってこれないから、そんなところダメだって。 それで先生は、行けって印鑑押して来いって。 そういわれても親父に言ってもダメだって言われて押してくれないの。それでしょうがなく親父が畑とか行ってる頃、学校抜け出して、30 分くらいかかる、昔は遠いんですよ、歩きだから。いないときに印鑑見つけて押して出しちゃった。それで来ることになっちゃった。 (それは行きたかったんですか?) 私はあまり行きたいとは思わなかったけど、その先生が行け行けって。3 人友達が行くことになった。同じ学校から。それで、行くことになっちゃったんですよ。

	(先生が相当強力に薦めたんだ。わが校から何人かって) そう。昔は割り当てのようなものがあって、それで後からの話じゃ、いくらか金が1人出すともらえるって。
Rさん	(その時どうして義勇軍に行こうと思ったんですか?) 担任の先生が「行かないか」って言ったから。どうせ家に、あそこにはおれないから兄弟一杯で。口減らしみたいにして。 (うん。で、内原に着いた時の景色とか気持ちって覚えています?) うーん、景色は3月の初めだから、寒かったよな。内原すごい寒いところだから。 (その時は、気持ちとしてはどんな気持ちだったんですか?) 喜びだね。 (え、喜び?へえー) 土地はいっぱいもらえるし。 (あー、なるほどね。あー、そうかそうか。え、喜び?へえー) 満州行けばね。満州行けばこれくらいの土地は。ちっちゃな村もらえる…(笑)。

(2) 基幹学校について (表 4)

義勇軍に入隊後すぐに選抜試験があり、彼らは幹部養成の基幹学校に入った。選抜試験は形ばかりですでに内申書等で入学者は決まっていたと彼らは言う。小学校で級長を務めるような人物が選ばれた。そのような人物が開拓団を構成していたことも、入植後、彼らが進取の気鋭に富み、朝日農業賞を受賞したり⁹、NHKのドキュメンタリーで紹介されるほどの成果を挙げたことの遠因になっていると推察された。

また志願して来たもののホームシックにかかる者がいたり、1年生から3年生という学年の違いによる優劣や下級生の面倒をみるという良さがあったりした。学年の上下関係は、少なからず入植後も引き継がれた。

表 4 基幹学校について

Tさん	それで毎年1万人ぐらいあそこへ入ってきたわけよ。あの、満州行くために。それで初めは送ったんだけどよ。そのどうも行って、あの加藤完治の意志がさ、現地で伝わってないと。これはどうしても若い連中にさ、あの加藤魂をさ、植え付けて。それであの満州に送ろう、幹部にして送ろうっちゅうんで。初めは幹部養成所っちゅうてさ、あの準幹部と言ったんだけど、その後名前を基幹学校っちゅう名前に変えて、それで基幹学校の一期生がさ、今ここでの3年生。 そんなんでも1万人ぐらいとって、中から100、5、60人あの基幹学校の生徒として採用して、それとそこであのいわゆる英語、あの当時のさ、日本では英語はもう違反
-----	--

	語だったのによ、その英語も教えるしよ。あの加藤完治っちゅうのは大した人でさ、敵を知り己を知ってよ、初めて真の勇者というちゅうあの主義だからさ。敵を知らずしてよ、な？だからそういう意味ではまあ加藤完治もおったのにさ、大東亜戦争始めたっちゅうのはどうも今考えてみるとさ。 (だからやっぱりこっちに来た人は基幹学校っていう選抜がかかっているから優秀な人たちが集まってたんですよ？) まあ単純に言うとなさ、田舎の秀才よ。だってもう全部さ、上申書っちゅうの？だから全部あれがしてたんだよ。
Gさん	というのはね、結局その満州へ行くとね…応募していった基幹学校へ入れば、幹部になれるぞと、偉くなれるぞと言ってそそのかされて、偉くなろうと思って来た人間もいるっていうんですよ。出世しようと思って(笑)。 (ああ、もう内原に来る目的が？) 目的が。まあ学校の先生にそう教わって。ところがね、面接でね、そういう人は落とされちゃうんだよね。 (ああ、そうなんだ(笑)) で、いや俺はもう満州へ行くつもりで来たんだから、内地へ残る方が嫌いなんだという人間はね、まあ見込みありと(笑)。僕なんかはね、どっちかっていうとね、もう満州へ行く、とね。残るのはやだというクチでしてね。 (ああ、その面接の時にですか) うん。そしたら偶然、お前は残れ、というようになっちゃったんだけどね。 まあそういう選別の仕方もあったらしいんですけどね。 (ふうん…じゃあ例えば、満州に行きたかったのに、基幹学校に入れって言われて、ええ？っていう感じですか？) そりゃまあそうですよね。だけど…でもやっぱりどっかに行きたくなえっていうのがあったんでしょうね。そうそう。行かなくて済むっていう気持ちはあったんでしょう。それで同期の友達に「俺、内地に残るんだ」って言ったら元気でやってこいよっつうんでね。彼は満州に行くので、もうお別れだからね。 (その友達は無事に満州から戻ってこられたんですか？) いやいや、戻ってこないです。
Gさん	(じゃあ今の言葉でいう、ホームシックになったりする人もいるんでしょうね) それでね、面白い規定があつてね、夜尿症はね、帰されるんですよ。

	(ああ、そうなんですか (笑)) 寝小便は。なぜかっていうとね、満州行ってね夜尿症だと、凍結しちゃうから。 そうするとね、帰りたい人間はね、わざとおしっこして、お前はもうだめだから帰れというようなね。だから、賢明な人はね、そういう生き延び方をしたのも事実ですよ。あと脱走ってのがあるしね。 (ああ、脱走もあるんだ) うん。それはもう、駅行って待ってて捕まえる。 (でもそういう帰りたい！っていう人は少数派で、みんなやっぱり、さあ！がんばるぞっていう感じですか?) 少数派にはそうですけどね。当時の空気としてね、まあ特に僕らのところはね、あれは行ってね、務まんなかったから帰ってきたと。あれはねあそこ行ってねダメだから逃げてきたとかっていうとね、もう村におれないんだよね。 (ああ、そうかそうか、レッテル貼られちゃうから) だからね、もう嫌でも嫌でももうそこにいなきゃいかんと。まあ 14, 5 歳だからね、子供だからね、そんなもんでしょう。
L さん	(最初、故郷から内原に向かう時の気持ちって覚えていらっしゃいますか?) そももう泣きべそ。口じゃでかいこと言っているけど。 (寂しい感じなの?) そうそう。だから、向こうから、現地から引きあげて来た人達が言うのに、いやあ家離れる時に涙で、もう家には帰って来れないよ。だから私も行ってはもう帰って来れないと。 (14 歳ですもんね。じゃ、その時に満州に行って。開拓して。土地持つぞーみたいな。そういう勇ましい気持ちはどうなんですか?) もう、何でもかんでもではないんだもん。皆、そんな勇ましい気持ちで来たみたいな話はするけれど、実際の所。うちの場合はそうだった。もうついて行くのが精一杯。
G さん	それでね、内原の生活そのものもね、やっぱり半ば軍隊式でね。もう、1 日早く入れば先輩だからね。 (それは同じ学年でも、1 日違いで違うってこと? 同じ学年でも) そうそうそう、同じ学年でもなの。うん、だから、新潟中隊はね、何年何月入った、千葉中隊は何年何月入った、俺らの方が 3 つ早えじゃねえかって (笑)。 このやろうって (笑)。

Mさん	内原に入って、1 か月くらい経ったらね、名前呼ばれてね。内原訓練所に準幹部養成所っていうのがあるから、お前達そこ行けって言われて。ほいで、行ったら試験だって言うんですよ。何の試験だろうなんて言って、やっているうちにね。それで2 晩くらいやりましたかね？試験を。 そしたら名前を呼ばれてね。130 人残されて。それで駆け足なんていわれて、びゅーって連れて行かれて、帰って来たら他の連中いないんですよ。皆、帰っちゃったんだ。自分の中隊に。で、お前等はこれから3 年間ここで勉強するから満州行かないって言われて。基幹学校でね。 我々は、別の教科書をやる。朝から晩までですよ。で、満州行った[者]はね、内原訓練所では、満州に行くための準備でしたからね。水は飲んじゃいかん。荷物はこれとこれと持ってけ、何を持ってけって。 (ということは、基幹学校には選ばれて入った訳ですね？優秀な子供たちが？) 結局、そういうことになったらしいです。そんな何で呼ばれたか分からないんですけどね。後で聞いた話によると、内申書を見て。だから、ほとんどが級長、副級長をやった顔ぶればかりだった。集まったのが。 (ということは、優秀な3 学年の子供たちが鹿放に来て、その後いろいろ開拓していくと、朝日農業賞をもらったりとか良い成績を収めて行くじゃないですか。農業の開拓について。しかも、記録もちゃんと残して。それは、基幹学校に選ばれるような人達だからこそ、ここまでの成績と発展が、その後得られたんですかね？) だと思いますがね。私等は後ろをついていったばかりですから、みんなのやる通り。
Rさん	満州行けばね。満州行けばこれくらいの土地はちっちゃな村もらえる…(笑)。 (そうか、「よし、じゃあ、やるぞ」みたいなね。将来に夢を抱いて来たんだね) ところが入って2 か月くらいしないうちに山形中隊から4 人が基幹学校というところに。こっちに入れって、それから、そこで幹部組んで終戦まで。 (なるほどね。じゃあ基幹学校に選ばれた時はどんな気持ちだったんですか？) それは残念だった。 (あー、そうか、満州を逃したから？行く機会がずれたから？) 満州行きたかったから。 (あー、そうか、幹部候補に選ばれたから嬉しいってよりは、残念だったんだ)
Qさん	(俺もいずれ満州行くんだなって思ってたわけですか？) いや、内心は行きたくねえ、行きたくねえ、って思ってたです。 戦後、宮島で拓友会をやった時には、先生にね、なぜ私だけがやられたんだって、

	送り出されたんだってね。私らが向こう行ってえらい苦労したって言ってね、先生に食って掛かっていった人もあったですよ。 我々にも、お前らこっち残っていいことしたって、こっち来て開拓だなんて、土地を払い下げ受けてやってるっていうのと、俺らは何年かして逃げて逃げてやっと帰ってきたっていうことになれば、ちょっと文句も言いたくなるですよ。 (もちろん来てからも苦労されたんだろうけど、送られた人から見れば) 向こうから見ればお前ら上手いことやったって言って、残って、土地までもらったって言って。もらったんじゃなくて買ってるんですけどね、これでも、安くてもなんでも。それでもそしてやってるって。俺らは何年もソ連に追われて逃げてきてあれしてるのって言ってね。我々にもある程度言ってるんですけど、先生にも食って掛かってるんですよ。どうして我々だけ満州やったんだって。
Lさん	(いよいよ内原に着いた時、どんな気持ちなんですかね?) もうどうしようもないんだな。その中に入ってしまうばもう弱音吐いてらんないから。 (基幹学校にそうやって入れたってことは、入れるということは選ばれし者みたいなエリートみたいな?) そういうことでしょう。
Aさん	基幹学校に入る試験があつてね、中隊長から何にも書かないで帰って来いってさんざん言われてね。ところがね、もう小学校から出た内申書が(基幹学校の)手元にいつてんだから。この子は成績が小学校の時どうだったてみんな分かってるんだ。 だから形の上で試験をただけで、その(試験の)成績で取ったり、はずしたりしたんじゃない。こうやって、口頭試問ですよ、おまえ何のために内原訓練所に来たんだって、分かりきったこと聞いて、その返事の仕方であらういんです。

(3) 加藤完治および石黒忠篤について

加藤完治は、1884(明治17)年に生まれ、東京帝国大学を卒業後、実践的な農学者として日本の農業の発展に取り組んだ。また満蒙開拓青少年義勇軍の所長として満州開拓を推進した。結果として満州に送り出した多くの若者が、彼の地で犠牲になったことの責任を問われるなど、加藤完治に対する評価は功罪併せ持つ。1967(昭和42)年死去。

石黒忠篤は、「農政の神様」と呼ばれ、戦前農相および商務相を務める。加藤完治と同年の1884(明治17)年生まれ。旧制七高(鹿児島)、東京帝国大学法科大学を卒業後、農商務省に勤務。石黒忠篤、加藤完治に那須皓(東大教授)、橋本伝左衛門(京大教授)、小平権一(元農林次官)を加えて「農政五人男」と呼ばれる。この5人が、日本国民高等学校や満蒙開拓青少年義勇軍の創設の中心人物となる。²

対象者の証言にも、義勇軍の訓練所所長であった加藤完治はもちろんのこと、石黒忠篤についても述べられていた(表5)。彼らの加藤完治に対する評価は肯定的であった(表6)。

表 5 石黒忠篤について

Tさん	それともう一つ、俺はあの当時ね、あの昭和 20 年にさ、あの日本のさ、農林大臣やっと思ったのがさ、石黒忠篤って人なんだよ。この人がね、あの我々を集めて講和した時にさ、あのこういう話をしたんだよ。 農業とはな、大自然にさ、奉仕するのがさ、農家の皆さんの仕事ですと。その農家の皆さんのお手伝いをするのはさ、農林大臣石黒忠篤、私の仕事ですっちゅう話をしてくれたんだよ。その時俺、なんか知らんけどカーッとよ、血が昇ってきてよ、ああ俺はこの人の一番弟子だよ(笑)。 (それ何歳の時に聞いたんですか?) 17 歳だよ。だからまだ戦時中だから。 (基幹学校に入った年) 基幹学校に入った年でさ。基幹学校の生徒全部集めてよ、それでそれこそあの原っぱでよ、話をしたんだよ。 (少年の心に響いたんだ) 響いた。 だからそれ以来さ、農業とはもうそういうもんでさ、自分の力でな、物を作るなんてよ、生意気なことを考えんなちゅうのがよ、俺の考え方。だからあのニワトリを飼っても麦を作っても落花生を作っても、落花生が何をして欲しいかちゅうことを聞くのはさ、人間の仕事で。 (人間が落花生を作ってやってるっていうわけじゃなくてね) そりゃもうとんでもない、とんでもない話。 それともう一つね、あの一番思ったのはさ、あの農業ちゅうのはさ、大自然の手伝いをするちゅうことは、まあ言うてみれば農地を空けておくちゅうことに対するさ、その罪悪感ちゅうの?そういうのがものすごく強くなってよ。
Qさん	農林大臣の石黒忠篤なんて人は、そのころ私らの加藤完治ってうちのあれと密接な関係にある人だったんだけど。 それで私、石黒忠篤の家に行ったことあるんですけどね。 あのね、ふすま貼りに行ったんですよ。大臣のうちに。 ふすまをね、日本橋の榛原（注：東京都中央区日本橋 2-7-1）っていう紙屋から紙を買って行ったんですけどね。ふすまなんて一度も張ったことないんですよ。で、私の先輩と 2 人で行って貼ったらもうくしゃくしゃで（笑）。 枚数何枚っていう紙だけ買っていったから 1 枚張ったけどそれがだめでまた 1 枚買いに行っただけ…。今でも榛原っていう紙屋あるかもしれないよ、確か。

	(戦後ですか?) 戦後戦後。 それでその大臣のそこで昼飯出してくれたんですよ。そしたらね、沢庵のこんな太いのを、この丸のまま出してくるんですよ。だってその当時沢庵なんて食いたくってもこの辺じゃなかった時だから。何しろ食いたいのは食いたいけど、田舎で食ったって沢庵って言ったら薄く切って並べてくれるんだと思ったから。 (そのまま?) そのまま。この太いのを。 聞いたら、今は包丁なんてステンレスが多いけど昔は鉄の包丁だから、その大臣は切ったら鉄臭い、細かく切ったんじゃ鉄のさびってというか味がついちゃうからダメなんだって言って。 (かじるわけなんだ。丸かぶり?) お手伝いさんが大きいままコロッと出す。だからそんな経験をしたことがありますけどね(笑)。それで一食。
--	---

表 6 加藤完治について

Aさん	(加藤完治さんはどういう感じの人なんですか?) あのね。正式に講演なんか聞くとおっかない感じですよ。怖い感じです。 髭があって。で、それから、ずばっと物を言うから、普通はああだろうこうだろうって言うけどそうじゃない。もう極論。極論というか結論をばっと言うわけ。だから普通の人は怖いって。 だからそれが分っておればね、決して怒ったり腹たてて言葉を荒げて言ってるんじゃないってことが分かれば、怖い人でも何でもない。だから、お前は内原に残って全部この稲を始末して、試験をやとったから、データを出して、そして、千葉へ行きなさいって言われたの。だから、いえば、残されたの。
Gさん	精神をほれ、改良しようという気持ちを込めての農作業ですよ。 それからあと、ううん…柔道ね、それから書道ね。 だけどほとんどが…精神調和ってのかね、うん、まあ、いわゆるその…先生、加藤完治ってのがね、農本主義つつってね、いわゆる国家は農業によって成り立つという思想でいるからね。あくまで精神主義なんですよ。うん。それをだから徹底的にたたきこまれるわけでしょ。
Gさん	(加藤完治先生は、朝礼なんかでこう、話す感じですか?) ええと、いや、本部っていうのがあってね、そこでもってあれですけどまあ完治先生は、会えないですよ。 彼はだってね、もう…政府との折衝がね。だからあとはもう宮様が来たりね、そういうその、政治的な意図でね、おそらく動いてたんでしょう。

	まあ加藤完治はそんなつもりは無いにしてもね、子たちを満州に送って健全な日本の食糧増産をやるんだっていう気持ちは間違いないと思うけどさ。 だけど、考えてみればね、14 や 15 歳でね、そんな気持ちにはならないですよ。まだ親を恋しがるでしょう。
--	---

(4) 終戦を迎えて

彼らは満州に送られることなく、茨城県の訓練所で終戦を迎えた（表 7）。

表 7 終戦（8 月 15 日）について

T さん	（終戦の時はガクってきたわけですか？それともああやった終わったって？） いやそういう風には思わなかったな。いや負けたんだちゅうのはさ、あの 8 月 15 日の日にさ。それはあの俺の先輩、やっぱり 3 年生がさ、戦争負けたぞちゅうて。聞かされて。 （それまでは満州に行こうと思ってたわけですよ。満州で見えるところは全部俺の土地になるような開拓をするつもりで） そうだよ。 （で、それがパァになるわけですよ） うん、パァになる。 （そうするとあーまた長野に戻るのかなってなっちゃうんですか？気持ち的に） いやその時はもうそうは思わなかったな。 （どんなことを思ったんですか？） そらもう、あの時は、戦争に負けた後はさ、あの基幹学校がね、あのあその義勇軍の後始末をさ、責任でさ、それに一生懸命になったんだよ。まあそういう意味では、あの将来どうするかなんちゅうふうなことはさ、まず考えてなかったかもしれないな。 （そんなこと考える余裕がなかった？） なかったと思う。
P さん	（覚えていますか？終戦の日のことは...？8 月 15 日の放送聞いたんですか？） まあ、どうなることかと。しかし、新たに、ソ連と戦争するんだとしか、まともに聞かえなかったんですよ。玉音放送のラジオのアレが悪くてね... （戦争が終わって、「故郷へ帰るか...」みたいなこと思ってたんですか？） んー...帰ってもね、四男坊で、いる場所もない（苦笑）そうでしょ？
I さん	（その時どう思ったんですか？戦争終わって）

	いやもう…初めあのね、義勇軍本部の近くに大講堂があるんですよ。そこへ 12 時になったら集まれっちゅうことでね、皆あれして。そしたら重大放送があるつつつてね。そしたらよく聞き取れなかったんですけど、まだ私らはね、負けるっちゅうような感じは全然なかったもんだからね、ほんでちょうどソ連が 9 日頃に参戦したからね、なにか陛下の声もかすれてザーザー言っって聞こえないしね。 (意味もわからないし？ (笑)) うん、意味わからん。また、『ソ連なんかが来たら頑張っって行け』っって言うような放送かなって思っって。で、しとったら夕方になったらね、なんか…幹部がね、いや戦争に負けたんだよっっていう、今は玉音放送だっったっって言っってね。 (じゃあ放送聞いってるときは戦争が終わったことは分かんかった？) ああ、まだ。分かんかったですね。意味とれなかったですよ。だから…加藤完治とかね、なんか上の人はんかね、涙ぐんだようなあれだっただけで、私は頑張らないかんぐらい。もうだっって東京だっって、もう 3 月あれでしょ？ (東京大空襲？) 空襲があっって。もうそりゃあ負けるの分かんっただろうけど、私らはまだまだね、頑張らなきゃあいかんぐらいに思っってね。 (でもそれで夕方になっって、実は負けたんだっって知っったときはどう思っったんですか？) もう…呆然としてね。やっぱり夜は、これからどうしようっってね、ほとんど寝れなかったですね。ちょうど私が補佐かなんかやっってね、下の 19 年の人と一緒に寝とっただけでね。まあほとんどどうしようか、どうなるんだろうかっちゅうのをね、もう呆然としたような感じで、もうよく寝れなかったですね。
L さん	(終戦の日のことは覚えてますか？) 覚えてますよ。その日は、お昼だよ。放送は。だから 10 時頃まで午前中の半分は、あの日は、厩を壊してたかな？下に穴を掘ってたのかな？で、その放送を聞いって。 (校庭で？) いや、訓練所の中のじゃないな？そこまで記憶無いな。建物の中で。皆で。だけど、良く聞き取れなくて。最後に耐え難くを耐えっってやつ。それで、ソ連と戦争始めたかなと思っって、午前と同じ作業を午後も始めたら、止め、止めっって言っって、もう何もかも終わったからダメっって。 (その時の気持ちを覚えています？言われた時) 楽になるかなと思っったこと位かな。その先どうなるか分かんないし。その先が皆分

	からないから怖がったんだろうけど。 (どうなるか分からないっていう不安も結構あった?) そう。 (楽になるかなということは、日々結構きつかった?) そういうことだね。 (で、ああ戦争終わったな。楽になるな。でも将来どうなるんだろうみたいな?) そう。先のことは全然。 (それが 15 歳?) だね。
R さん S さん (妻)	(終戦は、いよいよ満州に行くかもっていうときだった?) R さん：中隊が配属されて、満州へ行くはずだった。 S さん：それで、満州に行きたかったの?おじいちゃん。 R さん：ああ。そりゃあそうさ (笑)。 S さん：だって満州行ったら死んでたかもわからないんでしょ? R さん：半分以上帰ってねえから。 S さん：そうなのよ、残ってよかったのよ。

(5) 鹿放ヶ丘への入植

終戦の年、彼らは旧陸軍兵士による開墾の援農のため、千葉県四街道市鹿放ヶ丘に派遣された (表 8)。戦うための訓練を受けた旧陸軍の兵士たちでは作物を作ることができず、農業を営む訓練を受けた旧義勇軍の彼らの助けが必要であった。この時、彼らはまだ 15~18 歳の青少年であった。

また、初めてこの地に来た彼らには戦後の荒廃の中、何としても生きなければならないという思いがあった。また引率者高井篤らの指導のもと、義勇軍で培った技量を活かし、開墾、家畜の飼育、住宅の建築など自給自足の生活を始めた (表 9)。

表 8 鹿放ヶ丘への入植

T さん	そしたら、たまたま橋本閣下ちゅうのがその当時のさ、ここの下志津連隊のさ、連隊長ちゅうか親方やってたんだよ。それが戦後どうするかちゅうんでさ、加藤完治のところにさ、あの話聞きに行ったらいいんだよ。 そしたら加藤完治にさ、とにかくこれからさ、生きることがまず第一だからさ、食料作ることがさ、先決だちゅうんで。それで旧軍用地のここが 2 千 6 百町歩、木のない原っぱをだったのかな、そこで開拓をやるようにってな言われて、それでその開拓の手伝いをするのに、手伝いに行けちゅうて言われてよ。我々はここに来
------	--

	たわけよ。 あのなあ、来て一番先に思ったのはさ、あの大体、西にさ、富士山な、あれ北にさ、筑波山。あとなんにも無いんだから。地平線しかないんだよ。 いやまあ満州ちゅうのはよ、ああこんな茫漠千里ちゅうけどさ、満州ちゅうのはこんなところかなという風に俺は思ったな。 (まるで満州かのような広々とした？) 広々とした感じだったな。
I さん	(ご自身は、四街道に行くことはどうだったんですか？気持ち的には) いやあもう、そういうことで、要請があつて。こちらの橋本閣下から要請があつて。でとにかく私らは団体だったから、もう、先生の言われた通りで。四街道へね、こういうことで。農業やってんだから、向こうの兵隊の人が、講習を受けたいちゅうようなね。でまあ私らも永住するつもりではなかったらしいですね。で、一時はあの、群馬県のね、孺恋あたり入植するかもしれない、そういうようなあれもあったんですよ。だから 22 年頃までははっきりしなかったんです。鹿放はまあ一番痩せてるとこだとか言ってましたけど、そこへまあ…。
Mさん	(先遣隊で来たんですか？) 先遣隊で来たんですよ。だから、[昭和 20 年の] 9 月の 16 日ですかね、ここへ来たんですよ、あの～、[終戦から] 1 か月たった時に。 ある日、なんかね、前の日になったらね、お前ら明日、四街道に行くから、お前ら、ついて行けって言われて。それで、ついて来たんですよ。 それで何するって訳でもないんですよ。鍬だけ持って行けって。鍬と鎌一丁持たされて。それで、リュックの中に弁当入れて、あの、食器入れて、それで色々入れて、それで電車でここへ来て、それで今の栗山商社って所で栗山で泊ってたんですがね。その後、9 月中に、今の敬愛高校の跡の所、宿舎にしてた所ね、そこに移って。皆が 10 月の 10 日に内原から出て来た本隊ってのが、ここで開拓するんだけど、兵隊さんばかりでしょ。残ってるのは。だから鍬持ったことない、鎌持ったことない。鎌研いで、草刈るなんてこと知らないんですよ。だから、その指導をしてくれって言うことで来た訳ですから。 (実際教えた訳ですか？兵隊さんに？) 結局、一緒に仕事したり何かしましたけどね。とてもとても、あんな小さな鍬一丁でこの広い土地をやれって言ったって、無理な話なんですよ。それでも出来る所だけね。この軍隊の宿舎の周りを、比較的畑になっていた所もあったんですよ。だからそこのおこせる所だけおこせてね。 で、10 月 10 日に皆さんが、本隊が来ました。それで大体形が出来た。高井先生と加倉井先生だけでした。あの時は。

Lさん	(四街道駅に降りたんですか?) そう。 (当時の四街道駅はどんな景色?) 軍隊の町だから (焼野原じゃない?) 焼野原じゃない。 (で、駅に降りて、歩くんですか?) そう。今の敬愛高校ね。それが雨が降って赤いカッパ着て。 (その時の気持ちは?それはここで仕事するぞってことで来た?) 暫くはお手伝いだということで来た記憶が残っている。だから援農して、で2、3年やったらまた行先はという話で来ているから。 (援農のつもりで来ている?) そう。
-----	--

表9 入植時の気持ち

Iさん	(その頃は何を考えてたんですか?) うんうん、まあ、この土地でね、農業やっていけば、ここらは場所もあれだからね、良いかなって思ってたね。別に親からも帰って来いって…兄貴も兵隊から帰って来たしね、家の事情もまあまあだったからね。この地でやろうっちゅう気でね。 (なるほど、決心を固くしてたんだ) ほんとでまああの、農業のほうの、まあ代わりばんこだけど、農業主任とか何とか言ってたね、副とかしてね。何人かまとめて共同で作業でね。あの、日割りして今日はどこそこの何人がこう行けとかね、そういうあれもやってね。 (ああ、まとまりが良いんですね?皆。) そうです。そう…。
Mさん	(その時、何を考えたり、何を思っていたりしたんですか?) 分かんないんだよね。何で残ったんですか?って聞かれるんだけど。よそ行ったらってやることないでしょ。 (国に帰るっていう発想は無かったんですか?福島へ帰ろうかなみたいな) あん時は無かったんでしょうね。帰らなかったんだから。ただ、皆と一緒にい

	れば何とかなるっていうあれはありましたよ。ここで。
Rさん	(ここに来た時の景色とか印象とかって覚えていますか?) うーん、あんまり…覚えてないなあ。 食べ物が無かった。土地の分担は少なかったんだよ。普通の軍人から離職した人は、2町歩かもっと多かったのかな。俺らは1町歩ぐらいしか無いから。どうせ落伍者が出るって。 (あー、割り当てが少なかったんだ) まだ未成年だからね。
Qさん	(どう思ったんですか?ここ来た時に) いやいや。内原なんていうのは広いと思ってたんですよ、田舎から出てきたから。あそこに出てきたときはびっくりしたほど広がった。それを、今度こちらに来てみたらまだまだ広い(笑)。いやあ、満州っていうのはこれより広いのかつて。 (そうか、ここも結構広がったんだ、びっくりするくらい) いやあもう広がったですよ。 (だけどここ来たときはどんな感じで来たんですか?) いやいやだから、こちらへ来たって、掘り起こすっていったって笹藪で、そんな鍬でなんか掘ったって全然開拓にならないんですよ。子供ばかりで。それで、だんだん内原からも牛持ってきたり、豚持ってきたりしたから。そういう養豚部とか酪農部とか鶏だ野菜だって別れちゃって。で、私らは建築班っていう家立てる方に入ったんですよ。
Lさん	(その頃は、どんな気持ち?その頃の毎日) お手伝いじゃ無くなったじゃなくて、ここに入るということになれば、これじゃ駄目だと。そして私達の場合は、蔬菜部、野菜の受給部の方へ、ていう訳で入った。人によるとお前、豚やれ。お前、何やれ。というのが高井先生に言われたって人がいるから。私は野菜の先輩だよ。に頼んで、仲間に入れてくれと (野菜作るのが好きだったってこと?) 鍬の使い方を覚えないと農業、何も出来ないから。 (鍬使いを覚えたかった?) そう。そうでないと百姓出来ないから。 (その頃はもう諏訪に帰りたいとは思わなかった?) 全然思わなかった。

	(どうして?) 家が建って。同じ仕事出来る訳じゃないし。それでここに友達出来たら。離れるのが辛い。
--	---

(6) 高井篤について

170 名の未成年を引率し、その後この開拓団をリードしたのが高井篤である。哲学者三木清の妹を嫁に持つ彼自身も哲学者であった¹¹⁾。しかし机上の哲学ではなく、生きるという点に焦点を当てた哲学者であった。そんな彼との関係は今回のインタビューでも随所で語られた。そのほとんどは、高井篤の優れた先見性と指導性についてであった(表 10)。

表 10 高井篤について

T さん	(すごいですね。進取の気鋭にとんでるんですね) だからそれだって高井先生がさ、その当時はあのあれにはさ牛、鹿放ではあの馬をさ、利用してね。だから大型トラクターちゅうか、6 トン牽引車ってさ、昔あの砲を引っ張っておったさ、あのあれがあっただけよ。あのまあ言うなれば戦車みたいなんが。あれでさ、おこしたわけ。この開拓はね。 (それはあったんですね?) それはあのあったというか、あのこれは軍隊のさ、軍隊の野砲をな、大砲を引っ張ってるあの機械だったんだよ。それをねあのあれだ、終戦後全部爆破しろつつてよ、それで GHQ から指令が来たんだよ。その時に高井篤が GHQ まで行ってさ、これは我々が農業のためにさ、使いたいんだからさ、それはだめだって言ったらさ、GHQ は初め拒否しとっただけさ。だってさあんたの国だってな、みんなあの新しい農業はさ、機械によってさ、行われているじゃないかと。自分の国でやっとして日本でやっちゃだめちゅう理由はねえだろちゅうてよ。その高井篤が言い負かしてね、そうして残してそれを使ってね、この開拓やったのさ。下志津原の開拓は。
E さん (妻) F さん (子)	(高井先生はどんな印象の人なんですか?) E さん：あの人はまあやっぱり先生だからね、みんなちょっと一歩おいてたけどね。でもまあ道でなんか会うとどこのおとつあんと同じようなね。 F さん：俺何年生のときだろうな？運動会のときにさ、子供らを全員集めてさ、テントの下で話をしてくれた記憶があるんだよ。鹿放のやっぱし 2 世相手にだから開拓の話っていうかさ。運動会の昼休みかなんかの時にテントの下みんな子供たちだけを集めて鹿放はこういうところだからっていう話を聞いた記憶がうっすらとね。 E さん：高井先生の奥さんってさ、三木清さんの妹さん。
I さん	それでね、私は高井先生からね、何か特技かあってね、やりたいような人はね、特技習っても良いよー、と言われて、まだ終戦後だったんだけどね。とまあこれから食料もあれだから、醸造をね…。

	(醸造？) 醸造。味噌醤油作るのね。それをやってみようかなと思ってね。訓練所に醸造部があったんですよ、そこで、2 か月くらいですか、9 月ぐらいまでやって。でその内原訓練所の隣に、日本国民高等学校って言って、今の実践学園。そこに、醸造部があっけね。それで身につけようって思ってね。
Mさん	(記録を、結構、残されているじゃないですか？この皆さんて。何故ですか？何で、ああやってしっかりした 40 年史、20 年史、25 周年史とか) 高井先生の話は聞いたでしょう？親父って言ってましたが。あの人が浄土真宗ですがね、あれ。あの話、大分、聞かされたんですよ。そのせいか知らんけど。何もかにも一緒に。記録に残しておくっていう先生の希望っていうか、先生の考えが。記録に残すってのは、高井先生が皆に言わなくても皆がそのつもりでいたんじゃないでしょうかね。
Qさん	(じゃあ高井先生には全幅の信頼っていうか、高井先生についていけば…) ええ。 (なんとかなる？) そうそう。後になって分かったことだけどね、高井先生、加倉井先生、安達先生っておったけど、この先生方の退職金なんてのを最初はみんな、何しろ金入るところなんてないんだから。最初開拓に来たって何もない。
Lさん	(ここに住み始めて、建築部があるじゃないですか？すごく分業化されている組織だと思う。野菜作る班があったり。加工する班だったり。高井先生のアイディア？) うちらそんな構想練れないから。高井先生でしょ。 (今日来る前に墓地と神社を見てきましたが、あれも作ったのいつ頃？) 神社を作ったのが 30 年。墓地は 40 年かな。墓地はドームだけ。皆、それに入ればいいんじゃないかと。それで個人の墓地が欲しいという話が出て来て作った。
Hさん (子)	だからこの朝日農業賞もね、後から聞いたんだけど、酪農やってる人とかにこう質問すると、数字がぼんぼん出てきて、平均が今いくらで、1 日当たりいくら出るとかね、そんなのポンポン出てきて、ここまで上げなきゃだめだとかね。そういうのがあってね、ああこっちだってね、それで決まったっていう話なんですよ。 (だからやってる人たちの皆さんの意識が高いっていうか、深いっていうか) だから、要するにここに書いてありますけど、自分らで考えさせるんですよ。自分らで作ると、計画を作れと、こういうテーマについてお前ら考えて作れと。そういうやり方してるから、あの、こうしろとは言っていないから。 (なるほどね、自分たちで考える癖がついてるというか、言われたことをただやってるだけじゃないんですね)

そう、そこが違うじゃん。だからここに自己否定って書いてあるけど、あの、今やってんのでいいのかっていう話で、そっからスタートしてるんですよ。

(なるほどね)

こっから先行くにはどうしたらいいんだっていう。それでやらしてたから。

(そうか、みんな鍛えられてるんですね、そういう発想が)

そういう思考方向になってるんです。だから、ちょっと全く違うやり方が、うちの親父は実践哲学だ。それを農業にっていうことだね。

やっぱりね、親父はここに書いてあるけど、常に前へ前へ考えてたから。いろんなもの調べてたし。

(へー、これを…)

これを、開けてみてくださいよ。(注：一冊の蔵書を手渡す)

(ああ、線引いたり、赤で引いたり、すごいですね、読み込んでるって感じがしますね)

何回も読んでる。

だから線が左右に引いてある。

(色もいろんな色が使っててね。へー、そうか、やっぱり勉強家なんですね)

いやあ、勉強家でしたね。で、まあその…後ですごいと思ったのは、経済も勉強してるんですよ、金融とか。いろんなのをね。で、世界的な知識も集めてるんですよ、だから日本は今後どうなっていくっていうのを予測してるんです。

親父が発想して、こうしなきゃいけないって発想して、それを実現するために農林省に何回通い、県の農政課に何回通ってね、口説き落とすまでに。

親父はそのあの、緑の工場にするんだって言ってね、会社がこうなんだったら、農業は緑の工場なんだって。そいで必ず1つじゃダメだと。

(ああ、1つっていうのは?)

1つというのは畑でものを作る、米を作る、落花生を作る、これ1つじゃダメなんだと。もしこれが、天変地異があって、金が入らなかったらどうする。もう1つやりなさいって。

そのためには、なんなのつつたら、酪農だし、養鶏だし、養豚だして、自分の野菜だして言ってね、自分の好きなものをやれと。それで、それをやるためにはどうすりゃいいんだって考えろと。

	だから、そのこのそういうことができるようにするためには、機械を入れなきゃできないだろってそういう論理なんですよ。 (書いてありましたけど最初は共同でやろうとしてたけど) あのコルホーズね、ソ連のコルホーズって最初言ってましたよ、これみたくないうってね。100人で全員でやるって言って。最初はスタートはそうだったんですよ。で、だから、そういう共同で100人でやろうってことで。 (なるほど、そうか) でみんな自前なんですよ。 (それはやっぱり途中でそれはなかなか上手くいかないってことになって?) やっぱりそういうのがあの、みんなが望んでないっていうか、ということでささと辞めちゃうんですよ、うちの親父は。みんながやらないのはだめだって言って。じゃあどうするかって言って。 それで、じゃあ、個人だと、個人の家は全部自分らで作った。自分らっていうのは要するに大工するグループがあって、その連中がずーっと作っていくわけですよ。
Aさん	例えば農場全体を、最初、全共同でやったの。その責任者がこの人(高井先生)で、もう亡くなってしまいましたけど、何をやってもそつのない人で。(高井先生は)大きな声は出さない、おお！って叫ばない。準備をきちっとやっというて、さあ、今日は朝から…って、今日は小麦を播きますから、今日は稲刈りですから、というふうにして(指示する)。そういう人をちゃんと見る、なんてかな、見極めるあれ(能力)は素晴らしいあれだった。 そうでないとね、若い人が百何人集まってよ、力をひとつに合わせてよ、同じ方向に向いていなんかいかない。リーダーです。素質があったのね。ただ、気が短いところはあったけどね、それは人だからしょうないけど。 高井先生がいるからこそまとまった。若い集団を上手にあれしたんだ。若い人ばかりだから、高井先生みたいな人がいないとだめ。絶対だめ。まとまらないでしょうね。

(7) 開拓の初期

高井篤をリーダーとして170人の青少年が開拓を始めた。今でいうと高校生の年齢にあたる彼らは、お互いに協力し合いながらここでの作業にあたった。失うものがないゼロからの出発であったこと、同年代の仲間がいたこと、などが心の糧であったと証言している。また開拓するにあたって生活するべく、井戸、コミュニティ形成のための神社、グラウンド、墓地などを作っていた(表11)。

食糧事情はひっ迫しており、空腹をこらえて開墾作業に従事していた(表12)。また、稲毛海岸の海水で塩を作ったり、旧日本軍の演習地であった開墾地に落ちている鉛の砲弾を売ったりして糊口を凌いでいた(表13)。

表 11 開拓初期

Lさん	(援農しているうちに、だんだんここに定住というか、ここ開拓するんだということになっちゃったんだ、上の人達の話で) それに対して、ここの高井先生の話だと、ここにおさまるについては反対が一杯あったんだと。誰それさんは反対の先方だみたいなの。 (若者達の中で?) 軍隊の中で。軍人の中で。
Tさん	いやそりゃそういう意味じゃさ、あの私を家からさ変な言い方だけど一銭もな自分の親からのさ、あれっっちゃうのは一銭もなかったわけよ。だからあの全然バックすることがないわけよ。ゼロから始まってるから。 (あとは上がっていただけみたいなの) 上がるだけ(笑)。それともう一つはさ親とか兄弟とかさ、そういうしがらみも何にもないじゃん。自分で思ったことはさ、やればさ、そのまま成果になるかマイナスになるか、とにかくその時の考えたことによつてさ。 みんなそう。まあ我々の世代がさ、概ねあの満州行こうかちゅうて出したのはさ、家におつてもどうしようもねえな? 家におつたつて継ぐわけじゃないし、生活の糧も得にくい時代だったからね。だからまあそういう意味ではみんなあれじゃない? しがらみはなかったんじゃない?
Iさん	だから私は来る時は柳行李、それとあの寅さんが持つてゐるような鞆? あれ一用具とかあれ入れて、あとあれには梱包には服とかよ、入れて、それ 2 つだけだよ。だから必死で。 故郷の先生が俺等のところ寄つてくれて、お前大したもんだぞつてね。俺等のぐらいじゃこんだけの土地をやつてゐるのは居ないぞなんてね、もう 2、30 年前に来てくれたけど、ね。 (途中で帰ろうとは思わなかつたんですか?) まあ、それは思わなかつたですね。まあ、だけどここへ来た当時はね、やっぱりもうみすぼらしいというか、とにかく。着の身着のままだったですよ。お金は一銭もないべ。もう、国からなんも補助も無いべ。 (その時はどういう思いだったんですか?) まあ、ああいう人はいいなー、いいあれだなあと思つたりね、ちょっと貧相な感じはしたなーつちゅうかね。ああいう、まあ 1 人でね、あれだなあと思つたけどね。なんとか辛抱したからね。

	(じゃあそれから、こう、頑張って、あ、なんかもう人並みになったなって思うような時っていつ頃ですか?) んー、まあやっぱり、やっぱり 10 年ぐらいかかってるでしょうねえ。 うん。まあ開拓して 10 年はね。
R さん S さん (妻)	遊ぶのに夢中だった。 (どんな遊びをしたんですか?) キャッチボールだろ、映画観に行った。千葉まで。千葉まで歩いて行く。 あとは、もう仕事だよ。毎日開墾。一週間に一回くらいは休む。 (開墾鍬って普通の鍬とは違うんですか?) S さん：違うね。大きいでしょ。 R さん：違う違う、重いし。 (ああ、荒れ地に重さで食い込ませるんだ) R さん：でも俺らあんまり開墾しないんだよ。 (どうして?) R さん：6 トン牽引車って言って、演習所で使ってた牽引車があったんだよ。太い。それを利用して。使わせてもらって。それを砕くのが重いんだよ。 (砕く? あー、掘り起こしたやつを砕いて…) R さん：6 トン牽引車でおこすから、これくらいの。 (あー、でかいんだ。あーそうかそうか。それを砕いて小さくしていくんだね) R さん：ここはね、演習所だからね、チガヤが多かったんだよ。 (チガヤ、あー) R さん：チガヤの根っこは…取れないんだよ。 S さん：もじゃもじゃと根っこが。 (ここでどんな野菜を作ったんですか?) R さん：あー、忘れたけど簡単なやつだよ。畑は無いし、肥料は無いし。 (あー、じゃああんまり良いのはならないの? あんまり良いものはまだできない) R さん：みんなが食べる野菜を作るので精一杯で。結構、作った野菜とか畑の周りに生えてる、あの頃の草は野菜代わりに…。 S さん：うちも初めて聞く、今話してること。

	Rさん：野菜作るというか、草を採ってくる仕事だよ（笑）。 （そうか、作ってる野菜はそんなできないんだな） Rさん：トマトやナスを作るのは2年ぐらい経ってからじゃないか。
Qさん	農業なんて言うもんじゃないですよ！ 最初はまいた種よりも収穫した方が少なかったもん。 （できなかったんだ（笑）。） それ種取った方が良かった。
Qさん	（どういう風に井戸掘るんですか？） これくらいのところをスコップの柄を短くして。長いと当たるから。短く切って、大体3尺位の穴に掘って。 （じゃあもうスコップでひたすら下に向かって掘っていただけなんだ？） 掘っていくけど、そのまま掘っていくと赤土のうちはいいんですよ。大体3メートルとかそこらになるとちょっと砂が混ざってくる。それ以上掘っていくと、水が少し吹いてきて砂がさらさら流れるようになってきて、立っていられなくなるんですよ。どろどろして。 だからそれ以上は掘れないですよ、そのままだと。それで建築の大工の兄貴と一緒に来た建具やる人が松の板で桶を作った。大きな。桶っていったらふつう底があるんだけど、底なしのこのくらいの一間位の桶を作って…。 （底なし？） 底なし。それでその桶よりも少し広めに掘っておいてどんどん入れていくの。赤土のところは崩れないから入れなくても大丈夫なんだけど、その軟らかいところに行ったら、それを上から押して、どんどん入れて行ってバケツでどんどんこうしてくみ上げて。中ですくってはくみ上げて。 （で、その桶の壁はどんどん降ろしていくわけですね。足していくんだ） でもそれは2つも足せば十分。それで横からね、水と砂が寄ってくるからあんまり経っちゃうと動かなくなっちゃうんですよ。入っていかなくなって。だからそこで終りだってやるんだけど。
Qさん	（生き生きしてた頃の思い出とか頑張っていたころの思い出とかありますか？） 私、結局、建築やっとな、神社。建てたときの刻みっていうのを、ほとんど私一人でやりましたけど。 （へー。刻みっていうのは組み合わせるところ？） ええ、全部。切込みとか何とか。 伊勢の内宮に、みんなで見に行って、写真。だから、本当に中見に行くわけには

	いかないんですよ。だからまあ外の写真だけ撮ってきて、それを真似して。建築屋、この先の建築屋にいったから図面はそっちで書いたんですけど。刻んだのはほとんど全部。 だから、あの上にはあれが…名前入れてこう…書いておきました。壊したときにわかる。 (それ何年ですか？神社作ったのは) あれ 35 年頃です。その前はオオクマ建設っていう四街道の満州から引き揚げた建設屋に私が入ったところの厩の材料壊したもので作ったのが最初の神社なんです。それを建て替えようって言って今の神社に建て替えた。 (今のやつは 2 代目なんですか？) そうそう、2 代目。だからそれとかあのグラウンド。あのグラウンドもやっぱり 35 年頃なんですけどね。あのグラウンド作るのに、この部落の者で作ろうって言ってやったけど、やっぱりいくらやっても手でやっとならいくらやってもダメなんですよ。 そんな野球などもやった好きな人がグラウンドを作るっていうんでやったけどダメで。自衛隊に行ったんですよ。そしたら、そんなちっちゃい部落で自衛隊に頼むって来られたって困る、私らは出せないって。その当時は町だったんですけど、町が頼んでくるならわかるって。 それで町長、小川ジスケという人だったんですけど、その人に頼んで来ることになったけど、このブルとかそういうのは自衛隊の訓練のために出すのであって、ただ燃料だけは持ってくれて。燃料は大量にドラム缶で買って。だけど来てくれたから、今のグラウンドができたんですけどね。 (なるほどね。じゃあそのグラウンドを作るってところが印象に残ってるんだ) 何度も行ってね。行ったけど断られて、だけどこのままじゃダメだって言って市長、あの頃は町長に頼んでいって、ガソリンこちらもちで。もう何でもやりましたよ。
--	--

表 12 食料事情

I さん	16、17 歳の時にちょっと体壊して、病院なんか行ってね。ぼろの服で着の身着のままでしょうよ。昭和 22、23 年頃かな。ほしたらこちらのね、四街道の町の坊ちゃん、よお。お母さんが一緒についてよ、してるけど。こちらはお前、ぼろ着てさ、同じ年齢ぐらいでねえ。 ひもじいっちゃうか、そういう感じはしたことありましたね。 だってもう、鹿放の人は死ぬ、死んでもおかしくないくらいにね。だって食うものだってね、配給だけで、もう芋ばかりね、甘藷は甘藷ばかりだし。あとは味噌
------	---

	汁だったってね、塩と菜っ葉が入ってるような状態ですよ。 だから朝の食事の分を飯盒に詰めるんだよ、昼間ね、仕事に行くのに。それにあれですよ、もう朝、飯盒のしたにちょこっとしかないから、朝、昼飯をね、朝と一緒に食べちゃうんですよ。 ほしたら昼間は何にも無いんですよ。んで開墾しちゃあ昼飯でね、ちょっと日陰で寝るくらいでね。 (じゃあ昼飯は食わずに?) まあそうなる時もあったよ。
Mさん	(やはり、食うに困る毎日なんですか? 食べ物が無い毎日ですか?) 食べ物はずっと無かったですからね。最初はあったんですよ。 (最初? 戦争直後の最初?) そう。最初はあったんですよ。軍隊のやつも少し残ってたしね。訓練所から少し持って来たのもあったんですよ。こちら辺にも少し食料みたいのがあって、コメ、麦、ふすまとか。馬のエサがいっぱいありましたから。 ただ、共産党だったのが来てね。隠匿物資だと言われて、みんな持って行かれちゃった。皆、15、6歳だから知らないでしょう。だから、あの頃、共産党が幅利かせていたから。皆、持っていかれて、それから、食べ物が無くなった。だから、未だに食べ物の恨みはって、だめだって言うんですよ。 それで、その食べ物が無くなってからが苦しかったんですよ。食料がないからもう、朝飯と、昼の弁当をもう朝に食べてしまうんですよ。 (じゃあ、お昼には食べるもんがないじゃないですか) そんな無いんですけどね、こっちは意気地が無い方だからみんな食べちゃって、昼になると何も無いですよ。何にも無いんですよ! 途中。草むらで。全部竹藪ですからね。だからあの～、それこそコンビニだ、お店なんてないし、電気もついていないんだし、道路もまともな道路じゃないでしょう。だから昼になるともうひっくり返って、あっちでもこっちでも草むらの中でゴロゴロ寝てましたよ (笑)。 (夜は帰ったらあるんですか?) ありますよ。あるけどね。何あるかわからないですからね、サツマイモあったりね。サツマイモ取れてたからね。その前は、雑炊みたいのもあったしね。もう、味噌もないから塩汁だよ。
Mさん	(結婚した後、子供が生まれて来るんですけど、その頃は?) その頃が、一番辛かったでしょうね。 (どうしてですか?)

	収入が無いんですよ。今度は個人、個人でしょ。個人になっているからね。 (その時は、畑を収入源にしていた訳ですか？) そうですよ。農業ですから、春、秋、大体、秋の落花生、春先の麦、そんなものでしょう。収入って言うと。オカブを作ったりね。稲も、オカブもだいぶ作りしました。あとはサツマイモ、麦。その頃、手がないからね、せっかく麦作って積んどいたって、すぐ長雨なんか来ると、だんだん品質は悪くなるし、収入は悪くなるし。家畜だって大した収入は無かったからね。 (それをどうやって乗り越えて行くんですか？) 何とかかんとかでしょうね。あれなんか面白かったですよ。15 年くらい経ったんだから、昭和 35 年ですか。昭和 35 年っていうとまだまだ、子供だってまだ、5 つ、6 つの頃ですから。松の木の下にキノコが出るんですよ。初茸が。春先になると。朝、草刈に行くと、草刈った下に初茸があるから、それを採って来て、朝飯の味噌汁に入れたり。あれは、皆でそれでキノコを食べたと。 周りの防風林の中に全部出ましたから。大体松の木植えて、15 年から 20 年くらいの間だけ出るんですよ。それ以外は出ないんですよ。初茸です。 採っても採ってもキノコは千年の股をくぐるって言うくらいだから。そりゃ、見逃しがあるんですよ。翌日行くとまた出てるんですよ。そりゃ庭の芝の中だって翌朝見ると伸びてますからね。あの時はキノコなんか楽しみだったですよ。 (それはおいしいんですか？) そりゃ美味しいですよ。山から採って来て、すぐに味噌汁の中に入れて食べるんですから。
Q さん	(結局振り返ると、どんな感じですか？自分の人生を振り返ると) いやあ、今になればまあまあだった。だけど苦しかったね、食べ物なくて。 (ああ、やっぱり食べ物ないのが…) もう一番。食べ物ないのが一番だったね。 もういよいよ、足にできもの出来ちゃって。今でもできものできたあと皮がぴかぴか光ってますよ。
L さん	(昭和 25 年頃は、まだお腹減ってるんですか？) まだ。減ってますよ。 その思い出話だよ。友達の友達ってか、先輩だよ。婚礼でももって、赤飯が出たけど、その 3 日、米粒食べてなかったって。おかしいんだけど。やっぱり配給米はあったんだよな。25 年に配給米ってのは。どうしますかって言われて、どのくらいあるかって聞いたら地区でもって 3 俵くらいあったのかな。不完全農家ということで。1 年間食い扶持を自給出来ない農家。足りない分を配給する。だから、米穀年

	度っていうか、穀物の年度が何月になっているか、わからないんだけど、秋だと思った。やっぱし。で秋になると3か月分くらいもらう。3俵くらいになっちゃうんだよね。それを買うには金ないし。闇でもって、カスリで食う人に渡すと半分…食べれるんだよね。 それで、各地区回ってどうしますか、と聞いて、そのようにしたことを覚えている。それで25年度、6年、2年やったんじゃないかな。
Hさん (子)	(暮らしが良くなってきたなっていう印象とかっていうのは?) ないですよ。 (ないですか(笑)) 全然ない(笑)。 (中学生の頃、なんか最近、お腹がいっぱいになってきたとか) 小学校の時ね、弁当開くのが嫌だった。 (ああー、どんな弁当だったんですか?) んーお弁当にアジの干物が3匹、きんぴらごぼう。1品ですからね。 (ああー) 街の子は卵があって、何があって…。

表 13 稲毛の塩

Gさん	妻：いまだに話すんだけど、海の塩をね、聞いてくださいよ。海の塩を汲んできてそれをみそ汁の代わりに飲んだってのはこれはその話は有名なんですよ。 (ええ、どういうことですか?) だから、塩もなにもないでしょうよ。それで考えてね、あの…稲毛の海岸はまだね、国道がね、のところまで海が来てたんですよ。今は埋め立てちゃったけど。そこへね、ドラム缶積んでね、馬車で塩水汲んでそれで戻ってきてね、それをみそ汁のね味付けにしたりね。 そのうちにね、製塩所ってのをね、作ってね。それでおがくずを持ってってね、向こうで煮詰めて。 海岸で。それで作ってたんですよ。
Mさん	草なんか採って、野草なんかも結構食べましたからね。蛭もつかまえましたし。貝拾いに行ったら貝も食ったしね。 (あ、貝?稲毛で?) 稲毛で貝拾ってね。その日はいいんですよ。あさりでもね、生で。大事にしまっておいて翌朝食ったやつが、今度腹壊す。食中毒ですよ。そんなこと知らないです

	から。食中毒起こすなんて知らないからね。そいで 22、3 年頃から向こうに塩を作 ってね。稲毛の海岸の道端で、製塩所作って、小屋を作って。水を汲み上げて、で、 こっちからおがくずを運んで、それで下から蒸して塩作って。あれで、売ったりな んかしたんじゃないでしょうかね。それからその先は、僕らは分からないんですよ。 本部ってか事務所ってか、そっちでやってましたしね。 (凄いですよね。塩を作る仕組みを取り入れた訳ですよね) そうです。最初はこっちまでドラム缶で水を汲んで。海水を。汲んできて、こっ ちで燃して塩作ってたんです。 (それは、高井先生のアイデアですか?) そうですよ。お前考えろって、誰かが考えたって話になってますけどね、塩は無 かったんですから。統制品ですよ。 (海があるから塩作ろうかと。でもちょっと遠いんですよね) 遠いですよ。10 km位あるから。 (車で行けば、まあまあだけど。当時は歩いて行くんですか?) 歩きですよ、全部。自転車買ったのが、20…、結婚した時自転車あったんだから。 昭和 24、5 年、26、7 年頃に皆中古の自転車買ったでしよ。
--	--

表 14 鉛の弾

Mさん	ここら辺で鉛拾って売って。朝鮮戦争始まって。だから、朝鮮の人には悪いけど、 あれで助かったんですよ我々は。鉛だ鉄屑だ、結構売りました。 (結構いい値段で売れたんですか?) ああ、売れました。どっかその辺にまだ転がってますよ。あれもそうですよ。畑 の中から出てきたんだから。 (そんなのがゴロゴロあったんですか?) その上の信管はありましたよ。ちょっと持ち上げてみな。その小さいの。それ。 これ、当時で一番良くて 70 円くらいっていうもの。 そうです。だから朝からルンルンだったですよ。 こんな小さな鉛玉あるでしょう。あれが最初 40 銭か、1 円くらいになったって喜 んでいたんですから。
Qさん	一番早いのはあれで生活しとったです。 (あー、あの。砲弾。あれ綺麗な砲弾ですね。それがずいぶん高く売れたって話じ

	やないですか) そうなんです、それで生活してたの。 (ごろごろ転がってたの?) ええ、これが、昭和 26 年の朝鮮動乱の時に 1 つ 2 円したんです。それで私らが国から払い下げた土地は 1 円だったんです。1 坪 2 円で買ってその時はまだ年賦償還だから買ったって言ってもカネは払ってない。それで 1 鍬するとパチッと音がしてもうこれが 2 円 (笑)。 何にも金が入るところがないんだからこれしかないから。 (それ 2 円ってかなり価値が高いですよ) そりゃあ高いですよ。これ 1 つあればサンマ何匹も買えたんですよ。 (これは真鍮?) これは 40 円くらいした。 鉛玉でもこのちっちゃいのはこれくらいしかないからね。大きいのが出るともう。そうそう。それで鍬を入れて音がすると、ぱちって音がするとわああって。それで命つないでた。
P さん	この周辺の人たちで、職業として、砲弾を掘って、それを金にしてる人たちがすごく多かったんですよ。土を掘って、その中から出てくるんですよ。そういう職業をしていた人たちがいたんですよ。 そういう人たちがいたところは、グラウンドのところとか、わりあい、土が柔らかかったですよ。 (そうか、みんな、それを掘るためにやってるんだ…)

(8) 共同

高井篤の指導のもと、「共同」と彼らが呼ぶスタイルで開拓地の暮らしを安定させようとしていた。共同で暮らした期間は長くはないが、初期の彼らの生活の安定には欠かせない仕組みであったと思われる (表 15)。

表 15 共同時代

I さん	(酪農部の牛舎?) うん、ここへ来てた 10 人のうちの。ほんでね、あの、27、8 年の 3 月頃までね、この部屋で 6 人がね生活していたの。最後の共同がね、あの、私らが一番遅かったんですよ。最後の、個人に分かれるのが。 (ああ、そかそか、共同の時間が長かった?) 長かったんです。
------	--

(どうしてですか？それは)

あの、機械がね、あの、ドイツの。あの、何馬力の、あの、ホルダーっちゅうの？あれを私らはもう入れてね、ほんで 6 人でね、ある程度共同でね、やるつもりで居たんですよ。結婚しても俺なんか考えとしてはね、まあ、貧しい者がね、共同で広い面積で一緒にいてね、ほんでゆくゆくはまあちょっとあれかな。共産主義的なもの俺、あったのかな。ゆくゆくはね、1 つのあれして、で共同でってその 10 町ぐらいをね。

(あー。小さく 1 人ずつやるよりは？)

よりは、10 町ぐらいをしてね。ほんで重点的にやって、ほんでそんなにね、テレビとかなんか 1 個 1 個やらなくてもね。

(じゃあそういうことに皆も賛同してじゃあやろうとかって感じだったんですか？)

まあ皆でとにかく…、私はそう思ったけど、皆も共同でね、ある程度その機械でやろうっちゅって。で、6 人で最後までその、ホルダーを中心にね、で私らのところが 1 番の発起人なんですよ、ホルダーを入れるの。

(高かったんでしょ？)

うん。5、60 万はしたんじゃないですか。でだから、その時ね、なんか私らがあれして 4 台がドイツのあれを入れてたらしいですよ。ほんでその後が空冷式で、私のは水冷で、それを見習ってあの富士重工が、あの、ドリンっちゅうかなんちゅうかな、やっぱり 4 台ね、入って。最終的にはあの、ホルダーがね、6 台。

で、ま、中にね、早く別れる、だから 27 年からです、別れだしたのは。

(27 年から別れだした？)

うん、ほんでね、早く別れたい人はっちゅってね、じゃあ端からとっていけってね、松の園の、あの。

(土地を？)

土地を。じゃあ真ん中は共同で残すんだから、早いんなら端からとって行けってね、で。

(広さは？広さは人数分で割っというて？)

広さはもう、人数で割ってあるから、1 町 5、6 反ずつね。ほんでもう、家の宅地もできて。でまあちょうどその頃、家もね、完成しつつあったんですよ。でまあそこらに早く別れる人に優先的にね。この、私が今住んどったところはね、3 戸は早くに出来たんですよ。24 年 5、6 年か、6 年頃か。8 年まで居ったからね、2、3 年はここで居ったからね。別れたのは 24 年ぐらいからあれでしょ。

	(じゃあその時ご自身としては、共同でやって行こー！と思ってたのに、個人になっていったのはちょっとがっかりとかしたんですか？) んまあ、やむを得ないなあと思ったですね。まあ弱い人なんかもね、いたりしてまあ俺はそういうのも一緒にね、やるのが共同だと思っと思ったんだけどね。 (共同で使ってた道具とかも全部割ったんですか？) そうです。牛とかね、あれも。 (そうか、牛も分けて行くのか) そう、牛とか鶏とか豚とかね、売って。 (何頭ぐらいがじゃあ個人に来た？) だから私は、最初は 4 頭ぐらいおったかな、牛がね。あの、28 年の 2、3 月頃はね。んで…。 (搾りを？) うん。だからあの、ここへ別れて共同の時もね、お前乳牛やったらってね、言われて 1 頭責任もってね、朝晩搾って、やっていました。 ほんで他の 28 年の 3 月には皆別かれてね、その前にはもうあの、別れる準備しとったから、あの、お金もあの、落花生なんかももう、その頃はある程度この各組でね、でまあ会計は一緒に、もうだから 6 人でね、やってたんだ。残ったか金とかね。 (分けたんだ？) 分けて、あと家がある人は家进行评估してね、私のこの牛舎も 1 万円とかなんぼでってね、んで他の人はまたそういう牛舎なんかは無かったけど、私のところはねあの、豚飼ったり牛飼っと思ったからね。 (でその 6 人も別れて行くわけですよね？) そうそうそうそう、だから。 (それが 28 年の 3 月？) 3 月ですね。
Q さん	(牛をみんな飼ってましたか？) 必ず大抵牛 1 頭、豚 1～2 頭、鶏 5 羽 10 羽っていう風に、いわゆる昔の農家式に各家庭でいろいろな生き物を飼っておったです。それからだんだん共同でやったり、最初は個人で増やせなくて共同でやったり、私のこの前にも 7～80 頭の牛が。 そこに昔のサイロの跡があります。

Rさん Sさん (妻)	(なんかきっかけはあるんですか？共同をやることになった) Rさん：要するに、個人じゃあもう借金できないから、共同で借金しようってなると。 Sさん：ほら、あーいうの何資金だっけね。借りて…。 Rさん：まあ…高井先生があって、その人がまあ、保証人みたいなあれやって共同を始めようということになったんだ。共同っていうことは、ソビエトのコルホーズとかあーゆうのを思い出すけど、それは絶対ならねえってことで。 (そうゆう議論になったんだ、共同でやるとコルホーズみたいになるんじゃないの？いやそうじゃないよっていう話になったんだ？) Rさん：最初はだから、高井先生を中心にして、8軒出て、8人で協議を始めたんだよ。
Aさん	(その時はまだ全共同ですか。全共同の中で専業にしようとしてたってこと？) そうそう。俺一番最初に手を挙げたの。そのためには牛を増やさなければならぬ。だから鹿放農協で金貸してくれんかって言ったら、自分とこで食うだけの金無いのに。で、当時、今みたいなシステムが決まっていなかったから、まだ開拓できたばかりだから、ああでもないこうでもない。だから金出ないんだ。最初の、俺だって金貯まったらって、貯まるわけないんだから。それで、最初黙ってね、国民金融公庫、昔あったでしょ。今もあるかどうか。あそこで特定な人、大日の人なんですけど、の口利きで申し込むと、1頭か1頭半くらい、だから20万くらいまでは融資してもらえる。ただ支払いも厳しかったけどね。 もう待ってられないからというので、わたしそれを国民金融公庫の民間融資を受けて、それで最初2頭、いや最初共同にあったやつ(牛)を買って。で、それは共同のやつだからゆっくり払えばいい。何年かかかって。それも、牛の質は良いんですが、あんまり質が良いもんだから、下手くそな奴が搾ったから乳房炎やっちゃって。半分ちぢ駄目なの。2本しか出ない。だけど投資だと思って。子どもを取れば、1匹取れば元取れるということで、誰も取り手がなくて困ってるって言うから、はい私が頂きますって。そこで買ったの。それが牛飼いの始まりで。 で、そのうちに、さっきの国民金融公庫を借りて。これも後で見つかって、高井先生にどんぴしゃり怒られた。 (若い頃、専業になって、どういう牛飼いになろうと思ったんですか。どういうふうに牛の経営をしていこうと思ったんですか？) だから、牛だけで、酪農専業で。もちろん家族も食って、そして借金も払ってできるようにしたいと。それには最低でも6頭くらい、当時の計算で6頭だと思った。あの1頭当たりが今ほどでないから。ただエサも安い。6頭くらいまで飼わないと、牛の専業としては成り立たないっていう、教えられておった。さっきの黒沢先生なんか来るというから話をする。で、黒沢先生はそんな面倒臭い話はしないけど、大

	筋の話をしてくれると、後で息子が一緒におって、牛ってのはこういうんだって。彼は北海道行ったりこっちしてやってるし。子どもら3人おって。3人が1つずつやるくらい資金力あった。土地も買って。だから、そういう良い先輩に手を取って教えてもらったつうのは、何より、あれです。 (食っていくのに必要な6頭になったのはいつ頃ですか?) 最低6頭くらいないと、餌代を払ってあれするには。ちんたらちんたら1匹分で。 またそれを次はオスになるかメスになるか待ったんじゃ間に合わないちゅうことで、例の国民金融公庫を借りてやった。それ、あそこでも最初は1頭分しか借りれなかった。実績ないから。それを毎月毎月払う。で、今みたいに、自動引き落としじゃないんだ。払いに行くんですよ、ふふふ。郵便局まで。 で、それをきちんとやって実績作ったら、次は2頭分3頭分でも貸しますよということで、最高5頭借りました。で、いっぺんに。
Pさん	(それで、仲間内で助け合ったから…ある意味、続けられた…?) それで…まあ、あの～、弱いものを助けてもらっても、負担に耐え切れなくなる分が出るんだね? まあ、「人に迷惑かけてるんだ」っていう思いがね? あの～、どうしてもそこで、できなかったっていうのがね? 私は、まあ、比較的気楽、呑気な方だったから、アレなんだけども…。あの～、「この状況は、無理だから」って人が出てきたから。
Lさん	そう。この地域の、この部落の中の共同経営。それに対しても1人、身体の弱いのがいて仕事がまともに出来ないのがいたから。そこへ、重荷がのしかかったみたい。もう僕嫌だ、共同出来ないよって。 で、僕も日本の農業経営で共同は有り得ないなって。だから、もうそっちの方は黙ってて。共同はもうって。で、機械も共同経営の機械でなくて、共同利用の機械の方が良いっていう主張でいったから。今6人の共同が割れたら共同出来ないから個人にするって。で、僕の発言で共同が解散。一番遅いんだよね。 (共同の解散が遅いってこと? それ何年くらいですか?) それが昭和28年の3月から6人の共同経営が個人経営に移った。で、28年からここ。それも1つ言えば、共同経営に関心の強い人間が残って、外へは出ない。そこでお前出てけと。言わば、地域の連絡係り。最初は。その農業委員というのだろうか。で、そこへ出されて、9月か10月かな? 地域が分かれていったのが、それが24年の10月、あれは9月かな。地域に分かれたのが。 (地域に分かれた先でも共同だったのですね?) そう。ずっと延長線でもって、地域によってはそこから個人になった所もあるし。
Rさん	(共同はやっぱ大変ですか?)

S さん (妻)	R さん：うん。 S さん：大変。10 人 10 色だから。 R さん：1 人じゃないからねえ。家庭…家族みんなであれになるんでしょう？子供はあんまり手伝わないけど、夫婦でも…2 人が…同じ職場で…（笑）。行くんだけど…仕事は別々になったり…（沈黙）。 （やっぱこう、一緒にやるってのは大変なんだね） S さん：大変。 R さん：…やっぱり個人でやった方がいいんじゃないかねえかって言って…。 （解散してから？） S さん：共同を 10 年やって、今度解散してから個人で 10 年やった。ほんで、うちも辞めるの早かったのね。後継者がほら…うち女の子 2 人なの。ほんでね男の子いればその後継者がまた新しく鶏舎建てて、やろうっていう気があるけど、女の子だったからね、おじいちゃん 1 代でもう…。 ほんでだから鶏舎…イズミ会を解散する時に、いろいろ鶏舎を分けなきゃいけないのよ。共同にね。だからいろいろ…。
-------------	---

(9) 結婚、電気、暮らしの安定

昭和 25 年以降、適齢期を迎えた彼らに結婚の時期がやってくる。多くの花嫁を迎え、開拓団は新たなステージに入った（表 16）。お風呂ができ、電気が通り、暮らしも次第に安定してきた（表 17、18）。義勇軍入隊から入植初期までの口述に比べて、この時期の口述は、暮らしの厳しさは変わらないにしても、明るさが感じられる語りであった。結婚あるいは女性という存在が農村に与える大きな影響力を感じた。また開拓地を高速道路が貫き、その影響もあって生活は安定してきた（表 19）。

表 16 結婚

E さん (妻)	まあここ四街道を下りたときはびっくりしましたよね。 （最初に来た時？） ええ。朝着いたんですけどね、馬車が迎えに来てくれてて、それでも私なんかは馬車が迎えに来てくれたからねえ。あれだけど、友達っていうかそこにいる S さんっていうのはね、馬車で迎えに来てくれて。 （馬車ってどんな感じの馬車ですか？馬が 1 頭いるの？） 輪が 2 つで、リアカーのおっきいのっていうかね。 （つい西洋の馬車を思い浮かべちゃうんだけど）
I さん	結婚したその日ね、ちょうどいいよ、今日電気がついたよ、ってそれが 4 月の 8

	日じゃない 15 日頃かな？鹿放はちょっと電設工事が遅かったんでね。だからそれまではランプ生活ですよ。で、丁度こうして嫁を連れて来た日がね、まあ 14 日か 15 日かはっきりしないんだけど、おい、今日電気がついたよってね、ああ良かった良かったってね。それまで皆ランプ生活よ。 （じゃあ奥さんも喜んだんじゃないですか？） まあ喜んだしね。だから、またその時はあれかな、障子も無かったし畳も無かったし。ゴザ敷いて、暮らしてたんですよ。 （じゃあ結婚して来たらビックリしたんじゃないですか？奥さん） まあまあ、びっくりしたでしょう。ちょっと 4、5 日しくしくしたような感じはしたですね。 （そうですか。その時、どう思ったんですか？そういう若い新妻のしくしくしてるのを見て） うーん、まあなんとか頑張ろうっちゅうようなあれでね。慰めながら、向こうも覚悟はして来てるから。ただね、汽車がポーっとなんとかで、四街道のあれが聞こえりゃあやっぱり郷里を思い出したんだろうからね。
Mさん	（なるほどね。結婚したころはどんな？結婚はやっぱ、「やった！結婚した〜！」みたいな感じでした？） お前は結婚する前は全部草原と同じだったと言われるけど。着る物も何もなくて。結婚してようやく赤いものが洗濯物でぶら下がるようになったなど、言われまして。訓練所から支給されたような服着て、ぼろぼろの服で着てたからね。皆カーキ色の服着てたでしょ。3、4 年は全部ゲートル巻いて、朝から晩までずっとゲートル巻いてましたから。 それが今後、洗濯物は赤いのから青いのから。やっとなんか農村らしくなったなど。
Rさん Sさん (妻)	Sさん：それでちょうどねー、昔話ですけど、あの、ほら、あの、山形の方の、やっぱしそんな裕福じゃないですよ。だから、嫁入り支度はねタンス持たないで来たんですけど、竹行李と柳行李 2 つでね、それで「タンスのお金はそのうち送るから」ってことだったんですよ。それが、なかなか送ってもらえなくて、ちょうど子供がこの七五三の頃送ってくれたんですよ、お金。それで、あの一、千葉のデパート行って七五三の着物を買ったんです。 昭和 28 年の 4 月の 5 日に山形で結婚式を挙げて、ここに 7 日に来たのね。それで、村だからね、うちもほら、あの一、高島田結ったんですよ。ちゃんとした結婚式、村の結婚式したんですよ。それで、カメラが無いのよ。 それで、そこに、だから、その人に頼めば写真撮れたんだけど、それで、ほら、貧乏だからね、あの一、写真屋さんはいるのよ。

(あー、でもお金かかるんだ)

うん、かかるから頼めないわけね。そしたら、あの一、仲人の人が島田を、外すって言ったのよ、自分の自毛でね。そしたら、全部ほぐす時に「悔しくないか？」って「写真撮らないと悔しくないか？」って言われたけど、お父ちゃんの家嫁に来たわけでしょ、お父ちゃんの家で撮って…記念に撮ろうって言わない…撮れないわけよ。で、ほら、そういうお金もあんまり無いし…だから写真無いの。

(あー)

ちゃんと高島田結ってね。自分の毛でやったのにね、だから全然無いの。だけど仕方ない。「悔しくないか？」って言われたって、諦めるしかなかったのね。

(初めてここへ来た日のことを覚えていますか？)

ええ、覚えています。夜行で来て、事務所に寄ったの。その安達先生の自転車借りて、おじいちゃんが前に、私が後ろに乗ってね、それで来たのね。

安達先生の家寄ったの。奥さんがいて「疲れたでしょう」って、それから今度自転車を置いて、そこから今度お父ちゃんの後をトコトコね、家まで。

この場所。犬小屋…ですよ。8 畳 1 間と 6 畳 1 間なのが、犬小屋みたいなのがポツポツポツ、同じような…そう。で、安達先生は地区でも一番手前の端っこなのよ。うちらは奥の端っこといえば端っこなのよ。それでトコトコトコと後ろついてさ…いっぱい家があるわけよ。

それでどこまで行くんだろうと思って。そして最後の…ね、ここだって入ったわけ。その時ガッカリしたよ。だって何にも無いところでしょう。うちらもまだ山形の暮らしてきたところ、まだ隣り遠いけど、ここみたいじゃないのよね。物置みたいな。そして今度、豚…豚 1 頭、こじれた豚 1 頭いたよ。

(なるほどね。家の中はどんな感じ？家に入ったでしょ？)

うん、家は 8 畳間 1 つあったわけ、それで 6 畳ぐらいのがあって、4 畳半が 1 つあって、あとの、だから 1 畳半ぐらいのところが土間だったの。で、そこに台所…ってか、流しとあれがあって、そこでご飯を作ったりしてた。

それでね、あの一、8 畳あったら、普通なら仕切りが、障子あるでしょう。4 畳半も 8 畳間も仕切りも何も無いの。押入れも何も無いの。ただ押入れの棚があるだけ、何にも無いわけ。ほんで、茶箆筒も無い (笑)。

でも、うちのお父ちゃんはね、なんか一揃いでも一応揃えていたの。

(あー、迎えるにあたって)

うん、茶碗と、あとね、おひつね。と、あとすり鉢、それ今も使ってるけど。60 年も使ってる。

	(えー、見たい (笑)) 見たい？ (すり鉢を取りに行く) 買い換えようかなと思いながら、まだ使ってる。 (へえ、立派じゃないですか) それで、おじいちゃんがスリコギを用意してたのがこれなのね。 (え、これが用意したやつ？当時のやつ？) おじいちゃんはこのを用意してたわけ。だから、これは貴重なのよ。おじいちゃんの、これ、揃えてたの。 (へえー) あと、おひつも、もう無くなっちゃったね。使わないから。 (今はね、ジャーだからね) これだけ残ってるね。 (へえー。じゃあ、ちゃんとお嫁さんを迎えるにあたって、そういうものを用意してくれてたんだ) だから、おじいちゃんが用意して、あとのみんなは茶碗 2 つだけだとか色々と言いますよね。おじいちゃんはねー、やっぱり用意してくれてたのよね。 (へえー。じゃあこれ、用意したんですか？わざわざ用意したの？) Rさん：ん？ (お嫁さんを迎えるにあたって、お嫁さんが来るからって言って、このすり鉢とかを用意したの？) Rさん：結局そうじゃなくて、自分で食べるんだってなんだから (笑)。 (奥さんを幸せにできたと思いますか？) Rさん：思わない (笑)。 Sさん：思わない？うちは幸せだと思う。うちはねえ、自慢話だけどうちのおじいちゃんてね、すごくうちに尽くしてくれたの。 Rさん：不満だらけじゃねえかなあって思って (笑)。 Sさん：そりゃ不満もあるけど、不満の方が少ない。
Cさん (妻)	(じゃあ増雄さんとの馴れ初めからでも聞いていきますか) 馴れ初めっていうのはないんだよね。あの一まあ仲人さんになった人が、あの一是非見てみたらいいんだいいんだって、あんまり勧められたからここに来てみて、まあ一私の両親と私と、まあ一歩いてきたんだよね。 (犢橋 (コテハシ) から？それは何歳くらいのときですか？) それはね、18。 そしたらね、ここに来たら綿羊の子がねえ、あの一横っ飛びにはねていたのよ。

	真っ白い綿羊が。そいでさ、は一、これはいいやーっと思って、そいであのーいいって言っちゃったの。 (あー結婚してもいいっていっちゃったの?) うん。結婚はどんなもんか分かんなかったけど、とにかくうん、ここならいいって言ったの。 (あー、それは綿羊に惹かれたの?) うん (笑)。
--	---

表 17 初期の暮らし

Cさん (妻)	(だから火がつきにくいんだ?) うん火がつかないよ。 薪とは燃え方が全然違う。違う違う違う (笑)。薪じゃないんだから。 うん、あの新聞紙でやってさ、あのとうもろこしの殻が乾いたらそれを燃やすとかさ、落ち葉を持ってきて燃やすとかさ。まあそれであんまりしょうがないんで、うちのじいちゃんが 51 号線にナガノさんっていう財閥がいるんだけど、そのおばあちゃんと知り合ってさ、そしてそんなにあれだったら、うちがあの木を切った後残ったりするのをやるからおいでって言って。冬になるとそこ行ってあのもうあの枝を束ねて、馬車で持ってきてさ。それからねえもう風呂もねえ、あのぬるいと言っても燃やすもんがなかったりしなかったから、大分良かったんだよね。
Cさん (妻)	(じゃあ結婚して大変だなーと思う仕事って、ご飯炊き以外に何かありました?) (笑) うーん、そんなに大変とは思わなかったね。ただほら、お金が誰もなかったでしょ。だからあたしはそうねえ、ここに来て、あの今日四街道行くけど、歯医者行くけど、あの一お金欲しいって言ったらお金ないって言われたの。それでえーっと思ったんだけど、でもあたしもねえ、あーそういえば質屋の看板見たなと思って、あの着物は全部自分で、あの一訪問着とか留袖とか、その時は丸帯とか全部一式持って行って質に入れちゃったのよ。3 か月位して質に入れちゃったのよ。 でもほら家はおじいちゃんが四国でしょ? だからなんかの時はね、いつも畳の下にお金、まあ置いていたんだよね。で、おじいちゃん行くときはやっぱりどんなにしても 1 万円位は掛かったんじゃないかな。1 万円じゃあがなかったかな? (あー、大変だね帰るの) うん。だからそういうの、何かの時にはいつでも行かないといけないでしょう。それでよくお金を取っていたんだけど、お金がなくなると「ちょっと貸して」なんて言って (笑) 使っちゃってたけど。でも大抵はそうやって用意していると、大抵は使った後に具合が悪いときにあの電報が来るのよね。チチキトクスグ何て (笑)。

	ええーっ！何て思ってさ（笑）。
Eさん （妻）	昔やっぱり、それこそお風呂が無かったから、変な桶みたいなお風呂に入ったりね。お風呂が無いからドラム缶だとかね、持ってってそういうのに入ったわけですよね。 だから夜になると主人が玄関のところで番しててね、やっぱりいろんな人が来るから。私がそのドラム缶に入るわけ、お風呂（笑）。 （それを番してくれてるんだ？） そう。誰かが来るとね。 （若い女性が入ってるからね） だから戸があるわけでもないしね。入るときになると石持ってきて並べて（笑）。そんな生活だったんですよ。
Sさん （妻）	結婚した時、行李2つで来たのね。で鏡台も、その頃5000円ぐらいするのよ。それをお金でもらってきたの。これで鏡台買えって言ってね。で、その頃貧乏なのよ、やっぱしね。そんなにお金ね。…で鏡台買えって5000円もらってきたわけ現金で。それが風呂になっちゃったのよ。何にもここ来たら風呂もないでしょ？ それでね、うちの思い出はね、ここへきて何日目かして、お父ちゃんが畑手伝うので、うちも行ったわけよ。そしたら安達先生の奥さんにね、風呂焚きを頼まれちゃったわけ。五右衛門風呂。 そしたらねえ、山形じゃ木なんかふんだんにあるわけよ。山あるから。木の板が。燃料に不自由しないわけよ。ここはね、ゴマの殻とか。あとね、チガヤあるでしょう？チガヤの根っこガサガサーっとして。あの、ゴロゴロしてるのかやだから。見たことないでしょ？ うちもここへ来て初めてねえ。ほんで根っこはゴロゴロして、あとひげみたくボヤボヤーっと生えてるわけ。それを土おとして、少し乾かして。それをからからに乾かせば燃えるわけよ。それが焚き付け。燃料なのよ。風呂わかすのに。 それがねえうちの思い出。一番の困ったところなのよ。 それで、ぜーんぜん焚けないのよ（笑）。困っちゃってねえ…。安達先生の奥さんにもあんまり言えないし。来て何日目かで、おじいちゃん畑やってるのによ、走ってってね、「おじいちゃん、風呂あの…燃やせない」って言ってさ、困ってね。ほんでなんかで燃やしてもらったの。

表 18 電気が来た日

Mさん	(開拓が始まった頃、昭和 20 年代で思い出に残っていることで楽しかったこととか、いいイメージで残っていることってありますか?) 昭和 28 (1953) 年に電気が入ったでしょ。ここに。1 戸 1 戸、全部家がでてみんな決まったでしょ。土地と。その時が一番うれしい時ですけどね。電気が入った時が一番うれしかったですかね。 とにかくラジオが聞けたですからね。電気が入って。その前は鉱石ラジオで。コイル巻いてね。耳にあてて、イヤホンつけて。 (やっぱりラジオが聞けるのはすごい、いいですか?) それは良かったですよ。 (それは作業しながら?) 夜。夜ですよ。 (仕事終わって? 夜ね、飯食って~) 仕事終わって畑から自分の家の方角を見ると電気が点いてますから。それまでは電気点いてないから。全然、わからなかったですから。 (なるほど~、そうか、それまではようは真っ暗なんだ?) 真っ暗ですよ。 (それが、夜暗くなっても電気が点いて?) そう、そう。今度は家に帰って来てすぐに電気が点けれる訳ですから。 (じゃあ、結婚した頃に丁度電気が点いた頃なんですか?) 私は、電気が点くってのがわかってからです。 (なるほど。電気がつくから結婚しようみたいな?) うん (笑)。それこそ、あれなんですよ、子供が生まれた日なんですよ。電気が点いたのが。昭和 28 年の 3 月 14 日なんですよ。 (ああ、それが電気ついた日? 誕生日が? それはおめでたいですね (笑))
-----	---

表 19 生活の安定

Mさん	(暮らしが安定して来たなと思った頃は、いつくらいになるんですか?) 私は遅い方ですよ。あまり農業上手な方じゃなかったし。家畜も大した収入がある牛やさんみたいに毎日収入が入るわけじゃないし。ヤギは飼ってましたから、乳
-----	---

	は多少飲んでましたけど。ヤギの乳をね。やっぱり、そういう稼ぎに行ってからになってからですかね？ (ん？どこに？農協？) 農協行く前に日本通運だの、ああいう所に来てくれって言われて、行ってね。あそこの日東紡あたりの、当時はコンクリートのミキサーが無いでしょう。だから砂と砂利と別々に置いてあって、こっちとこっちと混ぜてコンクリを作っている時代ですからね。スコップ持って行って、人力で。あの頃からですよ。ニコヨンって覚えたのは。ニコヨンだけど。あそこは 250 円くれるから良いなんて言われてね。あの頃から多少外からの収入が、畑以外からの収入が入るようになったから。 (それは昭和 40 年くらいですか？) いや、もっと早いですよ。昭和 35 (1960) 年位からじゃないですかね。
F さん (子)	(鹿放はやっぱり土地にも恵まれてるんだ。) 土地に恵まれてるし、あとはうちなんかは高速道路に引っかかって、代替えで金もかけずに新しい牛舎も建っちゃったし。他の人たちはその 45 年前、45 年からこっちってというのは鹿放なんかはほぼ全員がね、家を建て直したっていうか。要するに高速道路かかった人たちがみんな家を新しく建てて、そのあと新築ブームっていうか。高速道路引っかかった人、それから引っかかって代替えを買うって言って代替えを売った人たちは、みんな高速道路の恩恵で家建てたけども、そういうものの恩恵を受けなかった人たちは、再配分とか植林を売ったりとかっていう格好で、みんなお家を建てた。 その直後からバブルが始まって、バブル始まったら向こう側の通りの人たちはね、一坪 30 万だ 40 万だって言ってた。その時代がすごくよかったっていうのもあるし、高速道路からこっちは景気がうんと良くなって、その時にうまく乗れた？乗かったっていうの？地域的に。だから場所は良かったから。だって富士開拓にしろこの辺で言えば那須だとか、ああいう開拓って全然そういう恩恵は受けてないから。

(10) 共同から個人経営の畜産へ

共同を解体し、個人経営に移行した。酪農、養鶏などそれぞれの畜種を選択し、飼育頭数も増やしていった。個人経営となっても、仲間との連携、新しいものに積極的に取り組む姿勢は変わらなかった (表 20、21)

表 20 酪農について

P さん	(牛は得意だったんですか？) いやあ、得意じゃ無かったよね (苦笑)。合わなかったな (苦笑)。 (合わなかった…どうしてそう、思うんですか？)
------	---

	あのね、気が、短いんだよね（苦笑）。だから、自分の言うこと聞かないのが…やっぱり（苦笑）まあ…あれなんだよねえ…やっぱり…気長になだめすかして、慣れさせるっちゅうのが、本当の…愛情をもって、接していかならんのが…なんじゃないかな？ （365 日ですもんね） それこそ、ほんとに今でこそ、機械でだいぶ早くできることもあるけども、昔はともかく、拭いて、あの～、手で搾って、手当てをして、それから、飼養管理とかっていうのを、1 人でまかなうっていうのはねえ…（苦笑）。
I さん	（じゃあ結婚して、で酪農ですよね？） そうそう、酪農です。そりゃあ大変だね。けど、牛が 1 頭か 2 頭ですからその頃は。まだ結婚した時は 1 頭だけでね、それで朝 6 時頃起きて、であの搾ってやって。昼間は、じゃがいもとかね、ほれから甘藷、ほれから麦。これあれですね、だから東京の築地市場でね、やっぱりここは恵まれていてね、千葉の市場もあったし、あれでね。 消費者が近くあったから、まあ同じ開拓地でもね、恵まれてあれだから、まあ私らもまあ土地はこれからも、一生だしと思ってね、まあ、頑張っては来たんですけどね。で、だから、落花生だって 1 町歩近くね。
I さん	（牛の数も増えていくんですか？） そのうちね。で、昭和 34（1959）年頃ですか、あの有畜農家資金を借りてね、牛舎建て、10、20 頭近く入るね、牛舎建てて。 （何頭くらいの規模の牛舎なんですか？） だいたい親子入れて、親が 17、8 頭と、子が 12、ああ 5、6 頭ね。入るようなあれを。資金借りてね。それで、その時からかな、もうミルカーもね。 （入れたんですか？） 入れたんですよ。 ほしたら私はあの、構造改善で借金して牛舎建てて、これで 3、4 頭、5 頭ぐらいしか飼えなかったから。で、まあ私もこれ、呑気ちゅうかあれだからね、あんまりガサガサやれないから、牛は性に合うと思ってね。まあ多頭化がすすめられて、だんだんあの、選択的拡大っちゅうね。それでね、でまあ俺も牛が合うからと思って、養鶏やる人もまあね、十何人出たし、酪農やるのも 15、6 人出てね。で、私はまあ借入れして 20 頭ぐらいやれるんでっちゅうことだね。 （どうして牛を、牛でいこうと思ったんですか？） いやだからまあ、性に合ってると思ってね。

	(稼ぎも良かったですか？牛って) まあ、そりゃあいいですね。 (平成4年にやめようと思った？) 目がね、なんか白内障かなんかね、片方がだんだんこうなってきたんですよ。そしたらやっぱりね。 (牛をやめる時の気持ちとかって覚えてますか？) まあもうね、目も悪くてこれもどうにもならんし、もうここらでね、旅行も何も出来てなくてしょうがないからって思ってね。
I さん	(牛で苦労話ってなんかありますか？) そうですね。まあ、そういう、まあね、旅行とかそういうのが出来ないでまあ、まあ自分でやり始めたあれだから別に苦労っちゅう苦労は無かったけどね。やっぱり朝晩、朝なんか起きるのもやっぱりね、億劫にだんだんね、なってきたですけど。 (じゃあ逆に楽しかったことは何ですか？酪農の上で) うんまあ、牛乳もね、新鮮なのが飲めてね。あっためて飲んでね。まあ健康上良いし。あと、まあそんなに楽しい楽しいってことは無いけど。 (自分の半生を振り返るとどんな印象ですか？) まあだから、そりゃあ酪農をやっとってね、良かったとは思いますがね。うん。1つの大きな経験になったと思いますね。
L さん	(搾乳を始めたのはいつ頃からですか？) うちで搾乳始めたのが、昭和30年くらいかな。 1頭。子牛から始めて。 (なんで牛を選んだんですか？) やっぱり堆肥を作るのに牛が一番いいかなと。 (土地は痩せてたんですか？) 全然。そう。だから落花生作っても皮むけないんだよ。シイナに近いだろうと。細実しかなくて。その頃は、ほとんどが殻つきじゃなくて、むき身で動いていたから。で、殻つきでも良いというのが出てきたから皆そこに預けて。 (牛を飼うのは大変でしたか？それとも結構収入源になりましたか？) 最終的にはそういうことだね。そしてこの道路が広げられる前に、こちらに牛舎を移して。

	(酪農は儲かりましたか?) 儲からない。税金、収めなかったもん。税務署の査定がまだ 4 千 kg だったかな。5 千か 5 千 kg くらいしか搾らなかったんじゃないかな。今は 1 万 kg 搾るでしょう。 (やめたのは何年ですか?) 搾乳をやめたのが。60 年まで搾ったかな? やっぱり大変になってやめたのかな。
C さん (妻)	(どんな毎日だったの? 朝何時に起きたんですか?) 朝 4 時。畑作もしていた。だって牛が 2 頭いたんだもん。1 つは自分の牛だったけど、1 つはあの一、うーん、いくらずつ返したのかなー。まあ牛乳代から、まあ半分は借りてたから。うん。だからそれを返したんだよね。 (そうか。2 匹とも搾乳の牛、おっぱい出す牛だったんだよね) うん。だからね、だけど結構、ほら朝搾って終わるでしょ。それでまあ昔のことだからふすまと切りわら切って、草をまずほら、刈って持ってくるの大変、リヤカーで持ってくるの大変だから、大変だったから。 まずあの雨が降ってない限り、山に連れて行くのよ。それで山の端からつないで 2 匹で。だからあの草刈らなくてもいいように (笑)。 今日はここ、明日はここっていうふうに繋いでいったの。うん。でも今みたいにその濃厚飼料もいい濃厚飼料食べさせなかったから、そんなには出なかった。そいでねえ 4 時に起きて、5 時位に今農協の売店があるあそこの辺位に搾った牛乳を持って行ったんだけど、その時にそれまでに冷やさなきゃなんねえのよ。石油缶でさ、水を汲んで、あの冷たい水に牛乳汲んで揺すって持って、そいで濾して輸送缶に入れて持って行ったんだけど。

表 21 養鶏

R さん S さん (妻)	(じゃあその後 10 年養鶏続けて、収入のメインは養鶏だったってことですか?) S さん：うん。うちら個人でね、あの鶏舎がほら、別にボロ鶏舎もらったのよ。うちの土地に建ってたのよ。そんで成鶏もそこで飼ってたけど。4000 羽くらいしか飼えなかったのよ。4000 羽っていうと一番少ないの。 (えっと、肉の鶏ですか? 卵?) S さん：卵。うん。 R さん：採卵養鶏ってやつだよ。 S さん：10 年やったの。個人で。 (結構儲かったの? 採卵養鶏って。) S さん：うちはねえ、儲かってたよ。うちは 2 人一生懸命…。あの羽数は 4000 羽だ
---------------------	--

けどね、産卵率をすごく…。羽数が少ないからすごく 2 人で面倒見たからね、産卵率…とにかく産卵率よくしなきゃだめなんですよ。儲けてもね。

(あ～産卵率が高かったんですね)

S さん：で、産卵率よくしたからね。その代りまめにほら…あの…ずっと餌箱あるでしょ？その鶏舎の。その餌箱の裏にね、産卵調査するんですよ。1 羽 1 羽。でケージに入ってるでしょ？そしたら、この鶏、今日は産んでねえって、産んでる時にちゃんと、チョークで。それをね、1 週間ぐらいやるんですよ。

(記録するんだね)

S さん：で、1 週間で 5 日産んでれば良しとして、だからあと…2 日しか産んでないのは淘汰するっていうか、廃棄に出しちゃうわけ。そうすると産卵率が良くなるの。

(なるほど。きめの細かい管理をやってたんだ)

S さん：うん。うちなんかはそれしよっちゅうしてたから。鶏舎がほら、4000 羽くらいしか飼えない鶏舎だから、規模が小さいからね。そういう産卵率をよくしないと儲けもあれだからって言ってね…。だからチョークの跡がまあ…。チョーク白とか赤とかこうするわけ。それをしよっちゅうしてた。まめに。

だからうちは儲かってたよ。羽数は少なくても。ほんでエサを朝晩やってたの、うちのお父ちゃん。そしたら…産卵率よくなって…、エサ多くして、エサ食べてるかして、みんな暑さと寒さ来ると産卵率落ちるのが、うちあんまり落ちなかったの。だからそれって、エサを朝晩やってた分、少し多く食べてたのかな？と思うよ。

(そんな養鶏をどうしてやめたんですか？養鶏を辞めた理由はなんですか？)

R さん：一番のあれは…こっちが、体おかしくして…。

S さん：後継者がね…いない。それでうちはね…後継者いなくてもね、もうちょっと早く…うちら割とボロいのもらったわけね、鶏舎。だからうち新しいの 1 棟建てたかったの。

そしたらじいちゃん絶対ねえ…うち建てようって言ってもね…おじいちゃん建てる気ないのよ～。

(どうして鶏舎の新築はしなかったんですか？)

R さん：あ～…ちょっと無理だなあって思って…。あの頃、俺はね、外へ出るのが好きで(笑)。動ける仕事をしていた。

S さん：個人で鶏飼ってる。羽数が少ないからって言って、おじいちゃんが週にね、2 回ぐらい農協に出てて、卵運びとか、週に 2 回ぐらい出てたよね？ほんで卵を千葉の方に運搬したりね。もう 1 人ホンダさんていうのおったけど、その人と 2 人でね、農協に出てたのよ。

(11) 鹿放地区の現状とこれから

1945 年に入植し 70 年以上の年月が経った。この地は、東京に近く、東京と成田空港を結ぶ東関東自動車道のインターも近いという利便性から、開発が進み、新住民のアパートやヤードと呼ばれる解体業者があちらこちらに見られるようになった。無計画に開発される鹿放ヶ丘を開拓者たちは半ばあきらめの目で見つめていた。しかしそこにはゼロから始めて、静かで豊かな老後を過ごしている姿もあった。また、時には遊び、時には口角泡を飛ばして議論してきた同世代の大勢の仲間がいたことも、この開拓団の大きな特徴であった（表 22、23）。

表 22 鹿放地区の現状について

T さん	まああの、世の中の歴史はそんなによ単純によ（笑）、あのこっちの思うようには（笑）いかないからね。まあ、まさにこの世はあの弱肉（笑）強食の時代だからさ、うん。 （えーそれはどういうことですか？） いやそれは、あのやっぱり経済力のあるものはさ、まあ自分の職業でね、まあその生きていけるけどさ、もう例えばあの親が亡くなったとか、あるいはその環境がかわったらさ、たちまちに収入が無くなればさ、まあ結果身を売るしかないことになってさ、土地を売るでしょ。そうするとまあ、まあご覧になった通りさ、もうある意味ではこの地区は世の中のゴミ捨て場によ（笑）。 （解体業者、ヤードって言うんでしたっけ？） ヤードっちゅう。 まああの、今話に出よったんほうはね、皆まあそれぞれに、まあその 1 世の時代はさ、なんとかあの普通にさ、やれたけど 2 世の代になってさ、続けられてるっちゅうのはさ、もうごくわずかなんだよね。 （その違いは何ですか？ 2 世になっても続けられてるか、られてないかっていうのは） だからまあ 1 つはさ、あの一なんちゅうの、農業で飯が食えるかどうかっちゅうことでさ、まず大体はあの、農業で 2 世も農業で飯を食っていけるっちゅう人はさ、もう正直言ってごく少ないよね。まあ 106 戸、ここあるんだけどさ、そのうちのせいぜい 10%、2 世がなんとか農業でやってるのは。 （そのヤードとか、今のここの地域の姿はちょっとう不甲斐ない点とかあるんですか？） いやそれは、あの俺的に考えればさ、それはあのしょうないっちゃしょうないんだけどさ、もう少しなんとかなんねえかなっちゅう気はあるよな。 あるけど行政がそれをどうこうする力もないし、逆に言えばそういうことも自然に対するな、その自然の姿じゃないからね。
------	--

	そういう意味でみるとさ、もう人生でよ、あれだよあの、まあ（沈黙）人生っちゃうのはさ、とにかく明日が分からないんだな。3代先なんちゅうのはさ、まず今わからんと思うんだよね。栄枯盛衰世の流れでよ。
Gさん	鹿放だけがね、その…調整区域にしてくれと。なぜかっていうとね、もう外部から入れないで、農業のその理想郷を作ろう（笑）という意味合いもあって、全部ここがねもうあの…調整区域なんですよ。 ところが時代が変わってくるとね、家を作ってはならんのはね、農地だけで、山林はね、それは家作ってもいいってことになったわけですよ。種目変更すれば。だからもう鹿放みんなバラバラでね、もう自動車だとかの墓場ですよ。廃タイヤだとかね。 だからあれがね、政策の1つの失敗だよ。
Iさん	（今こうやって道路が走って、店がいっぱいできてっていうのをご覧になってどんな印象ですか？今の鹿放） 今の鹿放なんかはね、だからまあ初めからね、ある程度区画して、農業で残すんならね。でもあんまりね、この土地を切り売りしてやっちゃったでしょ。 まああの、高速道路がたんと出来て値段が出たんですよ。それでまあ買収されたでしょ。それでまあ我々も。だって百姓だけじゃ家も建たないんだよ、このあばら家でも。
Iさん	産廃業者とかね、油とかタイヤとかね、そういうのも混じって入っちゃったからね。ほれが今になって鹿放って言われてもね、ほんとはこういう緑をね、残して、でまあ、ふれあいセンターも残して運動場もあってね、神社があって、ね。でこうやって団結してね、農業やってればね、緑が来て、皆ね、と思ってるんですけども、もう今じゃ手遅れでね。 倉庫とか、あの何だ、がちゃこんがちゃこんやってね、廃材物があったりね、ちょっと残念だけどね。 まあだってこれもね、生活の為に皆、植林のようなどこから売っちゃったからね。まともりつかなくなっちゃったんだけどね。だからまあ、我々もね、畑だけはね、この、これからだって人口がね、世界だって人口は増えてるし、だから土地はね、やっぱり1町なら1町ならはね、守ってあれしなきゃってまあ私もね、まあ保存してね、いざとなれば芋でも何でもね、作って食料は、日本で食べられるようにしないと、ね。全部外国から入ってって、油とかあんなの、食べねえからね。
Hさん (子)	（この鹿放ってのはかなり先生が描いてた通りに、かなりその近い形になったってことですかね？） そうですね、親父がそう、そうしたんですよ。だから、結局はそこで話がおしまいになっちゃったんです。

	(ん？どういう意味ですか？) そっから発展はないんですよ。 (あー、高井先生亡き後ってということですか？) 維持するだけで。 (うーん、そっかー) だから、そっから先をもっと考える人が、発想する人がいない。創造者がね。やっぱりこの鹿放農業の限界が。今はもう随分年いっちゃって、ひどい話になっていっちゃって、親父が見たら嘆くだろうなあとは思っただけ。
Fさん (子)	3世がやってくないと。だんだんここにきてみんな2世に政（まつりごと）が。 (じゃあ3世の人たちのさっき聞いたじゃないですか、2世が子供の頃ってどこの家でも入っていくみたいな一体感があったけど、3世は薄まってくるの？どうしても) もうやっぱし年もばらけて離れてきてるし、もう4世が小学校行ってるくらいだから。 (あともし50年100年たって鹿放って地名が残ってるだろうけど、人は薄まったりね。7世8世になって) だんだん、だんだんそういう風に薄まって行って、やがて普通の村になっていく。

表 23 開拓の仲間

Tさん	(ここに入ってきたその105人の人たちはいろいろ結構議論しあったり) いやそれはすごいんだよ！だいたいよ、その人がさ、ここで鹿放で議論するのをあの聞いたらさ、みんなさ、よくあんなこと言えるなっちゅう。だからもうそれはまさに兄弟以上。 そりゃもう平気でさ、その人のグサッと（笑）心の心底までな、しみるようなことをさ、平気で言うんだよ。平気で言うんだけどそれ以上にさ、相手のことを思いやる気持ちもさ、一方にあるからね。 それはよ、いや私は麦作組合のね組合長をさ、23年くらいやったのかな？それで今の若い人、2世がやってんだけど。それでその時にはね必ずさ、会議する前にね缶ビール1本ずつさ、な、渡すんだよ。そして缶ビール1杯飲んで、それから会議を始める。 それでその会議始める前にさ、一言言っておくのがね、とにかくここではさ、何を言ってもいいと。どんな議論してもいいけど、ここで決まったことはよ、守ろうぜと。 だからそりゃ酒飲むんだからさ、みんな喧々諤々だよ。言いたい放題。だけどそ
-----	--

	こで決まったっちゅう、これは今日の結論だぞって決まったことはさ、この次の仕事の上ではさ、それはルールとしてよ、守ろうぜと。 (兄弟以上の仲間。やっぱりそれが大きいんですよ。同じ年頃の人たちが) うんうん、そりゃもうそれもあるよね。 (先輩後輩あるとしても。だからすごいそういう意味では、この開拓の地っていうのは特異っていうか、他の開拓とは違う) いやいやそりゃもう全然違うと思うね。だから指導者がさ、高井篤で、そしてほとんどおんなし世代、3 つ違いが一緒になってそれで勝手に議論してね。そしてあの決めたらこれをやるぞちゅう。
P さん	(それは、その上下関係は、こっちに来てもあったんですか?) ゼロっちゅうことは、絶対ないです。それはないです、今でもないでしょ? (先輩と後輩の面でよかった思い出とか、いやだった思い出とかあったんですか?) 特別いやっちゅうことはなかったですねえ。ただもう、ここに来てからは、仲間意識、それがあの、アレ、全面っちゅうか、あれ出る... とにかく、みんなで生活していくための努力をしてたんだっていうのは、あったんでしょうね。
I さん	(そういう皆さんが、素晴らしいはたらきをするベースにはやっぱり内原とかその?) そうです。まあ仲良く元気で迷わずにっちゅうね。 (明るく元気で迷わずに? (笑)) これがもう良かったんですよ。で、そっから皆が仲良くしようというね。 (喧嘩しなかったですか? あんまり喧嘩無いの? 仲間割れみたいなのは?) 無い、無いね。まあ議論はするよ。するけど、芯からの喧嘩っちゅう、まあそれは酒飲みすぎでなんか 2、3 やったっちゅうのは聞くけど。 (なるほど、議論するんだ) 議論はするけどね。ちょっと他の人から見るとね。 (喧嘩しているように聞こえるけど、そういうのじゃなくってね?) 聞こえるけど、もうそれが終わればなんとかね。 (ちゃんと意見をすり合わせるってことですよ? そうかそうか、だからこそ良いものが生まれてくるのかも知れないですね) だから未だに俺もガーガー言うようなあれで。

Mさん	(やっぱり上級生であり、こう後輩たちの面倒を見ようという意識ってあったんですか？当時？) いや、そんなことは無いですよ。 (3年生だから2年生の面倒を見ようとか、1年生の面倒を見てあげようとか) それ程なかったですね。
Mさん	(仲間っぽいですよね。大学の寮とか、そういう雰囲気があるんだろうな) 全部、何もない所から始めたでしょう。だから、一斉によーいどんですから。平等なんです。それで皆一緒に、よーいどんで始めたですから。その後は、良くなったり、悪くなったりは、もうその人、その人の努力ですから。悪いと思ったら自分が仕事しないんだからというつもりでいた訳ですから。
Mさん	(やっぱり仲間っていうのは大きいんだな) そうですね。仲間がいたから続いたっていうのが一番かな。 (よく議論はしたというお話は何いしましたが) それは、凄かった。会議っていうと。もう、夜中、高井先生自体がそういう人でしたから。哲学、そうですね。だから～色々な議論は、12時過ぎとか、1時過ぎとかまでは普通でしたね。 (そういう議論がここの力を生み出したというか) そうなんじゃないですか。今だってなんだって、平気で話しますけど、それは恨みつらみがある訳じゃなしに。後で何を残すということはまるでないですから。 (なんか、そうゆうことが羨ましい) 確かにそれはいいことです。今になるとそうだったんだろうなって。今になって、何でここに残ったか？やめようと思わなかったって言われますけど。良く分かんないんだよね。 昨年で、ここへ来て70年ですから。だからこの連中、何もかにも若い頃のことを知ってますから。若い頃にはああった、こうだったって分かってますから。
Qさん	(もう先輩の言葉は絶対だとか) いやあ、向こうの時は、内原の時には絶対だったですよ。 (こっち来てからは？) こっち来てからはそれほどじゃなくなってきた。やっぱり。自然に。
Lさん	(話、少し現代に飛びますが、1年、2年、3年と3つの学年で来てますが、2年生の集まりみたいのは相当あるんですか？その後も) 今だにありますよね。 (学年のまとまりみたいのが？)

	はい。それをやめようよと言うのもいるけど。 (やめようよと言うのは?) それは、1年、2年、3年の仲だったから。でも3年生は辰年生まれで辰巳会って言って。2年生は2期会、1年生ははたち会。 (ずっと先輩、後輩的な関係性はある?あまりない?) どうのこうのはないけど。同年度というのだけは気持ちはある。 (先輩だから先輩をたてるというのは?) そういうのはもう全然ない。 (その頃はもう諏訪に帰りたいとは思わなかった?) 全然思わなかった。 (どうして?) 家が建って。同じ仕事出来る訳じゃないし。それでここに友達出来たら。離れるのが辛い。 (友達ってのは、大きいですか?) そうだよ。それが大きいんじゃないのかな? (その友達意識は、ずっと続く訳ですよね。昭和30年、40年。50年と、ずっと。この地域の特徴でもあるのかな) だと思いますよ。 (今でも友達意識みたいなのは?) ありますね。 (それは2期会の中で?それとも関係無しに?) その時には関係無しに。人が亡くなった時に遠くから身内が来れないのが多くいる。そうすると、同期の人間が親戚の方の席に座り。 (羨ましい感じがする) 佐倉で葬式。告別式っていうと、バス2台頼むんだよね。バス2台頼んで出て行く。それまでは、亡くなると家でやるでしょ。この庭を開放して。こん中入って。うちの場合親戚が多いから。 *****
--	--

	(仲間で議論することはあるんですか?) ここはもう、ここまで来る間、ずっと。生産に関してはもう議論。それをやってここに移って来ている訳だから。 (それは口論じゃなくて議論ですよ。) そう。だから、県の職員で、名前出てこないけど、この会議は喧嘩しているみたいだって。 (そうやってこの地域が発展してきたんですよ) だから構造改善事業、畑地改良事業とか、市街化調整区域の問題やら喧々諤々、動力線を曳く時もそうだったから。牛乳を出すのに。バルクの前に。
--	---

(12) 世代

彼らの大きな特徴の1つに、同年代の集団であるということが挙げられる。それは義勇軍の入隊年齢が15歳から18歳が主であったことによるが、その結果、彼らの子供や孫も同年代に集中している。そのため、世代と世代の塊の間に隙間ができ、地区の諸事の継承がやや希薄になるという状況もある(表24)。

満蒙開拓青少年義勇軍への志願に始まった彼らの人生であったが、この四街道市鹿放ヶ丘の原野に入植し、開発の波にもまれながらもなおしっかりと農業者として生きている後継者もいる。彼らに人生を振り返ってもらった時、その言葉にささやかな幸せと満足を感じた(表25)。

表24 世代について

Mさん	(結婚する時期もほぼ同じなわけでしょう、みんな?) それで困ること多い。子供達の年齢も同じでしょう。その下も同じでしょう。だからつながりが上手くいかないんですよ。 (ああ~そうか、固まりになってるんだ) そう。普通の村だとバラバラでしょう。だから上から教えてもらった、教えてもらったってできますけど。縦のつながりが所々途切れる。我々は、1年、2年、3年一緒でしたけど。子供たちになると20年位あくでしょう。 それより今困っているのは、我々大人が車やれなくなったこと。これが一番困る。買い物に行くのに。雨降った時に買い物に行くのにタクシー呼ぶっていった。
Eさん (妻)	仲良しの子供はよく集まったりね。夕方になって帰ってきないとその家の風呂に入って来たりね。もうほんとに家庭的っていうかね。
Lさん	(子供さんは皆さん大学は出ました?) 男は出たけど、女は出ていない。

	（この地区の子供さんたちの学歴が高い。大学とか。2世の子達の。それは幹部候補生と言うか、エリートっぽい人達なので、子供たちを大学に送ろうという意識が高いのかなと思いましたが） それは、うちの場合はある。というのは小学校卒でしょ。せめて子供等には学校を上までやって将来の職業を決めてもらいたいと。
Tさん	（すごい開拓集団だったんだな。その流れは、その結束力というかその、この雰囲気っていうのは、2世3世にも受け継がれてるんですか？） いやそれはね、残念ながらさ、そういう訓練がさ、されなかったからな。だからまああの私はあのそういう意味ではあの2世がみんなと麦作組合の跡取りやってくれるまではさ、2世とこう付き合ったからさ、まあ俺はあの仲間の中ではさ、一番若いもんとさ、長く付き合ったと思うんだよ。

表 25 人生について

Lさん	（Lさんの半生を振り返って、一言でいうとどんな感じの人生なんですか？） 他人にペコペコ頭を下げなくて、我儘勝手にやって来た人生。よく貴様生意気だと言われるくらい。同期の人間にやられたから。
Pさん	（生まれ変わったら、もう一度、この人生をやってみたいですか？） う～ん…どうでしょうねえ…何を望む、かな？ただ、漫然と生きている、だけ。ただね、先人の…立派な人、思うと…どういう境地で、できるのかなあ？ まあ、安達先生なんかは、自分たちが手がけてきた子供たちへの「償い」っちゅうか…「償い」っちゅうと悪いけれども、やはり、関わって来た人たちの、まあ、中国で亡くなったとか、気の毒なアレをさした、それに、一時でも…まあ、積極的についていうのは別にしても…仕事の上で、アレだったっていう…すごく、感じてた気が…するんだよね？ いうなれば…その人たちも、犠牲者なんだなって…思いますよね？ そうずっと…世の中って…そんなこと巡り合わなかった人は…何もせず…ただ、自分を生んでくれたところで…そのまま…自然を相手に、ただ生きていく…そのものが…本当に幸せなのか、どうか…。 やっぱり、人にも迷惑をかけ、いろんなあっても、人間としてやっぱり積極的に関わっていく人が、立派なのかなって…思ったりするんだけど…う～ん、とにかく、もお…今は、なんとも言えないねえ…。
Tさん	（何か楽しかった思い出ってありますか？楽しかった思い出。） あの楽しかったっちゅうかさ、まああの辛いこともあったけどさ、とにかくあの常にやることは新しいことをやったわけよ。 そして昭和40年頃からさ、ここであの麦のさ全面、全面播き。要するにあの機械

	による、機械で種播いて、とにかく一貫して機械でやってしまうという。もう直接人の手はさ、あの下さないという方法でさ。25 人がさ僕の出資に賛成してくれてそして麦作組合っていうのを作ったの。昭和 45 年ぐらい。 それからずーっとさ、麦作りをここでやってさきたんだよね。だからまあ、とにかく常に新しいことに挑戦するそれは、あのいつにかかってこのリーダーだった高井篤っていう人がさ、高井先生がね、とにかくうまいことおだてられてさ、日本の機械化、君がやらなくて誰がやるんだよってな（笑）。おだてに乗ってよ。
C さん (妻)	（昔の事で何か楽しかったとか嬉しかったことってありますか？） そうだねえあたしらはねえ、忙しかったせいもあるんだけど、今までお祭りだとか運動会とか行った事なかったの。 うん、地区の。鹿放の。それがおじいちゃんが亡くなった時、神社の役があと 1 年残っていて、初めて私が代わりに行って、ああ皆こんなに大勢来るんだってのが初めて分かったの。 （おじいさんが亡くなってからだから平成 14 年。それまでじゃあ、そういうのに顔出す機会がなかったの？） ない。だってさ 1 人行けば残ってるじゃない、仕事が。それ全部あたしがやってたんだから。だから運動会でもなんでもお祭りでも、あの春祭りでも、行ったことなかったのよ。 だけどおじいちゃんが亡くなってから、おばあちゃんもその位は出たいなって言ったら「ああ行って来い、行って来い」って言うから。それで行くように。春祭りもう一んと人にも会えるから行って来るって言うと「ああいいよ、行ってきな」なんて言うけど。 でもそれまでは、ほらやり残した仕事があるから、それを全部片付けなきゃならんでしょ。だから行った事なかったよ。だから皆良くお祭りだとか、鹿放でよくバスで行ったけれど…あれ何で行ったんだっけねえ。まあそういう人が集まるところにはあたしはほとんど出なかったよね。みんなおじいちゃんが亡くなってからあたしが「じゃあ行って来るねー！」何て言って行くようになったけれど(笑)。 （おじいさんが亡くなる前はやっぱり忙しくて出る暇がない？） うん。だから出る時は 1 軒から 1 人出ればいいんだよっていうから、おじいちゃんが全部代表して行ってたでしょ。だからあたしらは家でほら牛もいたせいもあるし、その時間に、ほらみんなの時間に合わせて行くのは牛や一杯仕事があるのよ。だからそれを終わらせていたらお昼になっちゃう。 （行きたかったですか？そういう所に） うん、たまにはね、行ってみたいなと思ったよ。でもまあしょうがないわなんて思っていたけど。そんなにあれでもなかったけれど。まあ「こんなこともあったん

	だ」なんて思うよね。だから運動会にはいつも半日は行くの(笑)。そして「おっ、ばあちゃん元気だね」って「おおう！」なんて騒いでさ(笑)。それで帰ってくるの(笑)。
--	--

Ⅲ. まとめ

この開拓団の特徴は、大きく以下の3点である。

1. 入植者 172 名が同世代の集団であること。しかもその年齢が 15 歳から 18 歳の未成年であったこと。そのため彼らは青年期、壮年期、老年期をほぼ全員が同時期に経験している。
2. 彼らは、満蒙開拓を志して全国各地から満蒙開拓義勇軍の訓練所に集まった。またその中から準幹部養成としての機能を持つ、基幹学校に選抜されたメンバーであった。そして渡満する前に終戦を迎え、この地に入植してきた。よって、この集団の結束力は強く、かつ資質も備えた人物が揃っていたと推察される。
3. 未成年の集団である彼らの「先生」あるいは「親父」として、高井篤（1902 年生まれ）、安達増三（1903 年生まれ）、加倉井正（1912 年生まれ）が引率し、この集団を育て上げた。とくに高井篤は実践的哲学者として、知見とリーダー性に富み、この若齢の集団を先進的な農業集団へと導いていった。

以上のような特徴をこの開拓団は有している。

現在でいえば中学生や高校生の年齢に相当する百余人の少年が集団で入植し、その後も営々と彼ら自身のライフサイクルを営みながらこの地で暮らしてきた。その結果、この開拓団は青年期、壮年期、老年期をほぼ全員が同時期に経験している。

彼らの話を聞くと、国策に翻弄された人生、というのは当たらない。大きな歴史の流れの中で、その時その時を精一杯生きる人生が見えた。たとえば開拓初期の貧しい状況で花嫁を迎える際に、米櫃やすりばち、そして真新しい 2 人分のお茶碗を用意したその時の青年の心もち、そしてそれを目にした花嫁の気持ち、それらに思いをはせる時、いつの時代も変わらぬ人の営みの豊かさと優しさを感じることができる。

ここに記録する口述記録は、1 人 1 人が歩んできた個人史ではあるが、同時に第 2 次世界大戦から 2017（平成 29）年の現代にかけて、日本が歩んできた大きな道のりでもあった。この集団の歴史として、あるいは日本という国の歴史を視るひとつの視座として、彼らの個人史をここに記録する。

この記録が、CD に保存したインタビュー音源も含めて、100 年 200 年残り、20 世紀および 21 世紀にこのような人生を歩んだ人たちがいたことが、未来の人たちにも伝わることを願って報告を終わる。

参考文献

1. 鹿放ヶ丘開拓誌、鹿放ヶ丘二十五周年記念事業委員会、1971（昭和 46）年
2. 思い出のアルバム、鹿放ヶ丘開拓四十周年実行委員会、1985（昭和 60）年
3. 拓くー鹿放ヶ丘開拓 50 年史、鹿放ヶ丘開拓五十周年記念事業委員会、1995（平成 7）年
4. 東京満蒙開拓団、東京の満蒙開拓団を知る会、ゆまに書房、2012（平成 24）年
5. 秋田県満蒙開拓青少年義勇軍外史、後藤和雄、無明舎、2014（平成 26）年
6. 満蒙開拓青少年義勇軍史研究、白取道博、北海道大学出版会、2008（平成 20）年
7. 満蒙開拓ー夢はるかなり（上下巻）、牧久、株式会社ウェッジ、2015（平成 27）年
8. 満蒙開拓団、加藤聖文、岩波書店、2017（平成 29）年
9. 前進する農民ー第 2 集ー1965 年朝日農業賞の 7 集団、朝日新聞社編、朝日新聞社、1965（昭和 40）年
10. 白陽樹の墓標ー満蒙開拓青少年義勇軍の記録、森本繁、原書房、2016（平成 28）年
11. 土に生きる哲学者ー高井篤氏（千葉県鹿放ヶ丘農業前組合長）の歩んだ道、板橋守邦、エコノミスト／毎日新聞社編、47(16)、163-168、1969.